幸地（西原村）

宮城　聰

時　一九六九年十一月十七日
場所　与那嶺英弘区長宅

氏名	現住所
山本亀一	[redacted]
与那嶺ナヘ	
与那嶺正一	
沢岻ツル	
与那嶺カマ	
与那嶺よし	
与那嶺英弘（区長）	

解説

幸地部落は四方が丘に囲まれている。現在は全部落が鬱蒼たるいろいろの樹木に被われていて、孤立しているように思われるこの部落が、二十五年前には、米軍の熾烈な砲火によって、周囲の丘と共に、戦後三、四年の間、地肌をはぎ取られたかのように、白一色の荒涼たる情景であったとは、今日では、想像もつかない。

西原村の場合は、沖縄戦において、米国の近代兵器の偉力を完膚なきまでに浴びていることは、各部落異なることはないが、この幸地部落は、沖縄戦の天王山であった浦添市前田部落と、二キロメートルにも足りない近距離で、その上に、金木少佐の率いる六十二師団工兵隊が、部落につづく東に陣地を構えていた。何の障害もなく沖縄の空を自由に飛び廻っていたトンボといわれた偵察機をはじめ、あらゆる機種の飛行機は自由に飛んだ。殊にトンボの偵察は正確無比で、陣地への艦砲や、飛行機からの正確な爆撃が行なわれた。したがって、幸地部落は、艦砲や爆撃、あらゆる米国の近代兵器による攻撃が一段と激しかったであろうことが想像される。

幸地部落の住民の犠牲と、戦禍を逃れた人たちの苦難も、西原村の他部落と同様に、甚大で、その実情は、なお多数の方がたに語って貰わねば、完全には解明できないことは勿論のことだが、しかし今回の座談会で、幸地字民の苦難と悲しい犠牲は、大略わかるであろうとも思っている。

幸地部落の戦前の戸数、人口は、戸数が百四十戸、人口は九百六十余名とされている。

ところが、戦争で生き残ることが出来た人口は、約三百三十人以内だそうで、三分の一強という比率である。三人から二人が戦争のために死んでしまった訳である。六人家族なら、四人は戦争、主としてアメリカの艦砲や爆弾やその他兵器の弾、火器で殺されてしまったのである。

一家全員が犠牲になった家が、百四十戸のうち五十三戸、三分の一以上の家が、家族一人も生き残ることが出来ないで、全滅している。この五十三戸の一家全滅は、同じ西原村でも、比率が多い訳ではないが、全滅ではなくて、一家から、ただ一人しか残っていない家も正確に調査されていないが、その数も相当に多いことは間

違いない。この座談会出席者の与那嶺よしさんの実家だと思うが、九人家族のうちで、現在八十余歳のおばあさん一人だけが生き残り、父母を初め子供たちが全部亡くなった。戦争の弾丸、破片で生命を奪われていることが語られている。

部落内を初めとして部落の周辺も人間の遺骨で埋められていた状態が、座談会の終了後、集まった皆さんによって相当に委しく語られた。区長さんが復員されたのは一九四八年で終戦三年後だが、部落の地面に横たわる遺骨は、収集した後とは思われないもので、毎日その収集に日を過し、余りの数の多いところから頭蓋骨など鼻骨に針金を通して運んだほどであったという話が出た。

四方が丘に囲まれた地勢の幸地部落だけに、沖縄戦の惨状を想像して、鬼気といったものを催す。座談会を終えて部落の道を歩いていると、戦争よ呪われてあれと心の底から自ずと湧いた。

山本亀一（四十二歳）農業

十月十日空襲は、日本の連合艦隊の大演習といっていました。わたしたちは屋取（他府県の在のこと）りに住んで、陣地の真中に囲まれていますので、本部落の人たちとの連絡はあまりないわけであります。初めは連合艦隊の大演習といって聞きましたのに、兵隊を並べて、各隊長が、敵の空襲であると報告して、配置につかしましたので、連合艦隊の演習ではない、敵の空襲だということがわかりました。

それから壕を掘って、それに入って、上陸したから（米軍）仕方がない。部落の背後（うしろ）の野原に壕掘って入って、こっちも大勢の人でおられないからといって、部落の前の墓場に、墓を開けて入っていましたが、また大勢の人でありますからおられないということになりまして、脂（豚脂）瓶をひっ担いで部落の後の壕に行きました。そこへ弾がバンバン攻撃して来ましたから、この杉林の中の壕の前から、また南に向かっている墓場へ入っておりました。

移動する時は照明弾が上るので大変危険だといいましたが、明るいから却って歩くのは都合がいいのでありました。そうしてその墓は、わたしが開けて、わたしの兄の家族たちもいっしょにいたのでありましたが、またここも立ち退きしなければならないといわれましたので、わたしの家族と妹聟の家族の二夫婦と甥や姪たちを合して十七名、首里に下ることにしました。

わたしの家族はわたしたち夫婦と上が十四歳、一番下は十・十空襲の後で生れてまだ五か月くらいしかなっていません。一家七人です。

首里は、今の大学の近く、赤田交番の上で、上の毛（モウは野っ原）の平ガマというところへ、親面会に二、三日でありますからといって、行っているわけでありますが、一か月余りそこにいました。その下には、球部隊の弾薬壕といって大きな壕がありました。首里の人たちはそこのことを「上の毛の平ガマー」といっていました。

そこは前に二度も立ち退きして、わたしたちが行った時は三回目であったそうですが、そこで一か月余りも暮しました。

そこでの生活は、今頃は弾も落ちないからといって、酒屋（さかや）、酒屋

（酒醸所のことを酒屋といい、首里は昔から泡盛製造の唯一の場所であった）を廻って、米を拾ったり、また酒（泡盛のこと）をさがしたのです。それは無くて、諸味（もろみ）を持って来て飲んだ。酒や諸味や米を取りに行くには、いっしょに行くと、弾が来た場合は大変だから、一人ひとり行くのだといって、各おの離ればなれに歩いているわけだが、同じ時間に当って、同じ場所で、親子互に怪我して、壕に帰ってからはじめて、お前も怪我したのか、あなたも怪我したのかとわかりました。それでわたしは、脂味噌の中から豚肉を取って、きまりが悪いからみんなにいうなよといって、後の方に行って、その豚肉を疵のところにすりつけて癒しました。

それから園比武（そのひやむ）御嶽のところに軍の米が置いてあって、それが艦砲に当って焼米になっていたようだが、兄の妻が、アヒー小（小さい兄さんの意）よと叫ぶので、誰かが酷いことになっているのでないかと裸かのまま飛び出して、訳けをきいたのでまた着物を着て、それを取って来ました。そんなふうで、そこでは難儀もしません。むしろ楽しんで暮していたのでありましたが、壕の前に夜切って来たログワイ（蘆薈＝ろかい）で疑装して、それが中に立って、あちこちを見まして、恐くもありましたが楽しんで昼もおりました。

その時一番珍しかったのは、首里市の焼けた時です。三ケ（赤田、崎山などの三ブロック）の一廓は一度に焼きまして、また儀保の道下からマカンジャーラ（儀保の西がわ崖下から那覇がわ）一度に立派に焼いて、三回目には、周囲を焼いて、首里城もその時に焼いているのでありますよ。そうして首里は全部焼かれて、木や草も全然なくなってしまいました。わたしたちは三回目の立ち退きの後にしか入っていないのでありますが、わたしの弟の三男に立ち退くよう兵隊が命じてありました。それでここから下ろうなということにした。そうして行く時は、一人ひとり歩こうというように決めてあるのだが、はじめは、トモイ（首里付近の丘らしい）まで壕さがしに来て、トモイの後の山に行ったら、ここは首里城と同じくらいに高い場所だ、ここにいた方がいい、ということで、またそこに十日ばかりいましたが、また下って行かねばならなくなりました。島尻へという命令ですから、一日橋一つしかあいていないという注意がありました。

島尻へ下ろうとしている時に、球部隊の弾薬倉庫が爆発しているということでした。真相はどういうことだったかわかりませんが、自爆したのであるとの話でありましたよ。そこに三百人余り入っていて自爆したという話でありましたが、これが爆発した時には、壕の前はただほんのちょっとずつしか木や草が焼けていませんでしたが、わたしは壕から逃げようと思って、一人の兵隊といっしょになりました。もう四時頃でありましたが、アメリカの戦闘機（機種は必ずしも戦闘機かどうか）は西の海に行っているから大丈夫といっていたのに、近くに一発来ました。もう一発来るだろうと思っていると、また、一発やって来ました。それでわたしは「何だ兵隊さんあれは」といいましたら、煙が天に連りました。それでもとの壕へ逃げ帰ろうとしている道に、かなり広い場所がありますが、そこは何とか名もありますが、そこで兵隊と二人いっしょに引っくり返されました。わたしは、この兵隊が岩のとんがったところから何

か叫びながら引っくり返って落ちて行くのまで見ました。わたしは、五体は打ちひしがれて体は動かない、目ばかりくるくる廻わして、物を考えることもできなかったが、もう一つ弾が落ちたら、もうこれまでだなということだけは考えました。それで右の足をすっかり打ちのめされてしまっていましたが、左はさしつかえなくあたりまえでありましたからようやく壕へ入りまして、水は飲むなとみんながいいましたが、同じ死ぬのである、渇いて死ぬより飲んで死んだ方がいいといって、砂糖持って来たので砂糖を食べたり水を飲んだりして助かりました。

その後はまた、一人ひとりということで、おのおの別れてしまった。そうしたら、もう大変なことになった、もうちりぢりになってどういうことになるのかといって、心配していた。それで、わたしたちの子供が、また帰って来ていると有難いことだがと思いながら平ガマーに戻って行ったら、七人の家族がいっしょになって、もうその時からは、姉の家族は前の方にして、わたしは後から、中の方には子供たちをおいて、歩きました。その交番所の付近、カタノハナからの廻りの今のバス道路など、足も入れられないほどで、石もゴロゴロ落ちていて、その間あいだには、こんなにも人が死んでいるといいます。わたしは、何でもない、人ではない、布団があるんだといって、なるべく子供等に厭やな気持ちを持たさないようにと思いましたが、兵隊も下顎取られているのもあれば、口の上を取られているのもおるし、手を飛ばされているもの、足を切り取られたものもおったが、杖をついても歩いていれば、匐って進んでいるのもおった。

わたしたちは避難用といって米の粉を砂糖と交ぜて持っていましたから、それを出して食べさせようとしたら、こっちがないから、わたしは下の顎が無いから、わたしは上の口がないから食べられないといって、食べませんでした。そうして大カクジャーまで、ほとんど道いっぱい、死人と、匐ったり、いざったりして歩いている人でしたよ。

そうして、一日橋越えると同時に、弟、は三男ですが、この弟の妻が腕に怪我しました。その時は相変らず頭の上から弾がヒュウヒュウしていましたので子供たちのことが心配で心騒ぎがし、三郎よ、かめ子よと二、三度声を出しました。そうしたら、「大声掛けると駄目ですよ、おじさん」といいましたから「駄目ですか兵隊さん」といって、子供たちには筵を被せてやったりしましたが、弟たちとも別べつになっていました。ちょうどその一晩に、夜は白じら明け初めていましたが、饒波・高安（両方豊見城村）につきました。

わたしも後頭部を怪我しているのですから、雨に濡れて死ぬよりか、あれはわたしたち助けるために造られてあるのだ、といって、軍の廐に入って雨を霽らして、それから座波（兼城村）、賀数（同）を通って糸満の照屋に行きました。

糸満・照屋に行きましたところ、青年が、余所から来た人を入れてはいけない、作物を荒らすので、余所島の人を入れてはいけないといって常会があったから、いれない、といわれた。そこの部落の人たちも壕にいるのだから、それでは、人の入っていない壕なら入っていいだろうといって入っていました。

そうしていたら、そこの青年たちが杖をもって、避難民は早く行けといいました。雨に濡れては死ぬんだし、出て歩くとどこかで死ぬかわからない立場であるから、それなら、居るだけのものを殺してくれ、同じ死ぬのであるからといって、ようやくここにおることができました。

そこにいて、天気のいい日は、港川に敵は来ているといいましたから、ヒラゴーといって、そこの墓でありますが、その墓は四、五人ずつはいれますが、もしか知ったものが来るかもしらんからと思って、いつでも入れるように三つ四つ開けてありました。

わたしたちは、馬小屋に入っておりましたが、夜の十一時頃でありました。弾が七つ落ちたから大丈夫だからというのです。それはわたしたちがよく知っている豚商人をしていた首里の人でありましたが、母屋にいたのです。危いから壕の方に行こう、戦争で弾が七つ落ちたから大丈夫ということはない、といったら、もう大丈夫だ、ここにいなさいよ、立っているなり坐っているなりして夜は明かすことができるよ、という。わたしはまた、戦争に七つ落ちたからもう落ちないということはないよといいました。

そうしたら、わたしが言うのが遅く、すぐそこに、中柱に直撃受けましたよ、上の家、下の家いっぱい入っていた避難民が、ただ一弾で殺されて、怪我している三人だけがようやく生きたのでないかというくらいでありましたよ。

それからそこから立ち退きされましたから、真栄里（まえざと）（高嶺村）の東の田原（たばる）屋取りというところへ行って、しばらくはいました。そこよりは新垣（あらかき）がいいといいますので、新垣へ行きました。夜に下っておりますから、夜はいい塩梅でありましたが、翌日になりましたから朝から晩まで、弾が撃たれ通しで、また国吉（くによし）（高嶺村）へ行くことにしました。

この新垣で、姉がほかに小用しに行って、山の中に蓋被われている芋カス（澱粉を取った搾りかす）があったんですね、蓋を開けて見たら、芋カスが入っているんですね。これはいいものがあるといって、臼に入れて棒でつき砕いて、それを三升炊きの鍋に入れて煮ることにしました。三升炊きの鉄鍋は、取手のある米三升炊ける大きな鍋ですよ。そうしたら、芋カスばかり煮ては食べられない、何か青い物を入れなければ食べられないから芋の葉をさがして来ようということで芋の葉をさがしに行きましたが、芋蔓はもうすっかり取り尽されて見つかりません。その時に桑の葉が見つかりましたので、それを入れて煮ることにしました。

この芋カスが桑の葉の間から泡が出たので沸ぎり始めようとしている時に、敵が近寄っているというので、さあ行こうということになって、そのまだ煮えない芋カス御飯そのまま担いで、そうして国吉部落へ行きました。

国吉部落へ行きましたら、軍が火を燃す間しか火は燃やされないという命令でありましたから、軍の炊事より先きに行って、芋カスの三升炊きを煮ることにしました。ちょうどとろとろと沸き始めようとしていた時に、ひっ担いで来た芋カスと桑の葉の雑炊を見て、子供たちは、これが食べられるかといっていました。それでわたしは「今度の戦争は、クリマデー食エーワド、戦サマカスサ」（今度の戦争はこの芋カスと桑の葉の雑炊みたいなものも食べてこそ戦争は

まかすことができる）といって、わたしがかきこんで食べて見せましたら、子供たちもみんな、争って食べてしまいました。

ここに二晩泊り、また真栄里の東の田原屋取りというところにかなり長らくいました。それから糸数（玉城村）部落へ越えまして、ここも二戦場でありまして弾が来ましたから恐くておられません。さあまた戻ろうといって、伊敷（真壁村）部落へ行って、そこでまた敵が来るから下れといいましたから、こっちからまた喜屋武・福地へ下りました。福地へ行きました時、下は立っていましたが、上の方は全部ふっ飛ばされている茅葺家がありましたから、それにまた茅を俄かに被ぶせて住んでいました。まあその時は喜屋武岬への爆弾が落ちるんです。

十二時までの間までに入っていないところが土ほこりがたちましてね、十二時頃になったから裏の山に敵が来ているから避難しなさいよ、早く逃げなさいと兵隊が叫けんでいたというので、ギーザの内の野原へ行きました。その時はもう、ちょっと夜が白みかけて、明けそめました。子供たちも、声を立ててはいけない、赤ん坊も泣かさないようにしましたが、死ぬ時はいっしょであると、呼吸も口を大人の手で塞いでさせました。

わたしたちがいたギーザ（バンタ）は、具志頭（村）トウ原（原（はる）名）の裏でありました、内がわであります。トウ原の南で頂きになっております。もう敵に囲まれて、撃たれているのですから、みんなメーウーキー（向かう鉢巻）して捕虜に上るということになりましたが、わたしたちは、同じく死ぬのである、メーウーキーしてもしなくても死ぬのはいっしょであると、考えていました。そうして十二時までは機関銃を撃っていましたが、子供が泣いたので撃たなくなりました。それでもとうとう捕虜取られました。具志頭トウ原の頂きに上りました。それは六月の二十四、五日頃ではありませんでしょうかね。

わたしたちが捕虜になった頃までは、アメリカが捨ててある食物が沢山ありました。三日したら作業に出ていますから、すべて大きな四辻がある草の中は罐詰でありますからね、ジャガ芋罐詰です、靴で蹴っ飛ばして、カンと音を立てて飛ぶのは空の罐詰、プクという音で飛ばないのは、中実のある罐詰、それを一個所見つけ出したら十人では担ぐことができないほどありました。話しよりもそれは上でした。あれら（米兵）は食べて余るのは、いたずらするようにして立派に並べて置いてありましたよ。

捕虜になったのは、六月二十四、五日ではなかったかと思うんですがね。首里の平ガマーで擬装するといって、壕が爆発して、わたしは見たのではありませんが、近くに通信隊の兵隊がいたが、その中の兵隊と知り合いになって、これは五月二十五日頃でしたが、今日は五月の二十五日になっているから、もう少しの辛抱だよおじさん、頑張りなさいよ、と言っていたが、それからは十四、五日しか待ちません。

「あなたが出て少し経って、あなた方が肋骨を打ち折られたといって、二人に肩に手を入れられて連れて行かれたが、壕は同じ一つ、お爺さんたちがいた壕だよ、あっちに寝かされた」

（同席の婦人へ言った）

わたしの本家のウフスー（上の兄さん）は、石に足を挟まれて、脹脛（ふくらはぎ）を引っこ抜いたのですが、表面の皮がすっかり剝げとられ

て、赤い肉がむき出してぶよぶよして、白い脂も見えました。
わたしはここ（足の腿）を弾でやられまして穴ができてガーゼーを入れてありましたが、痒いので引っこ抜いで、その代りに、脂味噌から肉を取って、味噌はしゃぶり取って、その肉を中に押し込んで置きました。足は全体ちょっと膨れていました。首里の平ガマーという壕でですよ、今は教会が建っているところのちょっと上です。
わたしは終戦後、あっちに親の遺骨を取りに行きました。わたしの母ですが、母は耳が遠かったもんですから、前は簞笥が遮っていましたが、わたしの兄はその後に足を痛めて寝たり起きたりしていました。母は水を汲んで来て、味噌汁を作るといってやっていましたが、物音は聞かない、アメリカ兵が来て手榴弾を入れて、七十余る老人が二人そこでやられたんです。腹腔の皮をはぎ取られて筋肉全部出ていた 兄さんは、壕から出て捕虜取られて、 戦後に死にました。
壕に弾が飛んで来てやられました時、わたしは気を失っていました。ちょっと変な声を出していたらしいんです。「あれ、わたしたちの小さい兄さんの声だが」といって、弟の妻が聞いたというが、わたしは気絶した後はすっかり五体は動かない、頭ばかり振り振りして、思考力が戻った時に、もう一弾来ると、これでわたしは終りだがという考えが浮びました。この足は動かない、匐って、壕に入って癒っています。
わたしは次女を負んぶして、棒の片方には芋葛、片方は味噌やいろいろの物を、それを担いで島尻へ越えています。道中では、弾が激しい時は、担いでいる荷物を放り出し、また前進すると、前の方でも弾が落ちて荷物もバラバラにされると、またこれを拾い集めて担いで、また少し歩いて自分の側に弾が落ちると、荷物は放り投げて、道には他人の道具も散らばっているあんばいでありました。
戦争中で一番心配した、苦しかった、不安だったことは、前に話しました平ガマーというところから立ち退きした時、家族がわかれわかれになったことです。長男は食物を担いで、姉智たちはまだちょっと行っているのだから追駈けて行けよ、わたしはすぐ行くから次男と次女をつれて、識名の墓場の前に行って二つに分れて、また妻は、赤ん坊を抱いて、その時親たちがそばの壕にいるので、親に、もうわたしたちは先きに行こうね、といいに行ったらお父さんは、「もう日も上っている、何時になるか、八時か九時になるよ、こっちにそのままいなさい」といわれたので居たという。しかしいつまで待っても来ない。ちりぢりになって、もう別れわかれにどこで死ぬかわからない、と思っていたが、夕方になると、弾は撃たないので、戻って首里に来まして、皆いっしょになって、前と後から挾んで、真中にして避難して歩きました。別れわかれになって、生きているのか、死んでいるのかわからない、あの時は何とも言われない心細い、苦しいというか、不安に体が締めつけられているような思いでありました。
わたしたちは歩くのが、一日越しも、毎夜もだったわけですが、歩くときは別でしたが、おったところは弾が少なかったんです。
一戦場はですね、後の山に乗り込むと、八時、九時から十二時まで、目標になっているところは、何一つ残りませんよ。バンバン

煙が立つくらい、人も見えませんよ、一屋敷越えた先きは。そうしてその後は小銃弾が来ますがね、その時は木の葉や草を集めて頭に被って、首を出して、敵の攻撃振りを見るのです。まるで珍らしいものを見物しているように見たわけですよ。わたしたちは、いつも一戦場を歩きました。一戦場は、弾は上を飛んで下には来ません。二戦場は珍らしい程弾が落ちましたよ。
糸数に行った時は、昔の製糖小屋に入っていました。あまり弾が激しいので、場所を変えようと他の所に行って芋を取りましたが、芋はあるが薪木がないので、糸数の製糖工場に行って、薪木と杓子を取って来ようと考えて行きました。それを取って戻って来ると、その途中で後から榴散弾が、ポッコイ、ポッコイと音して、そこに落ちましたからね。命も、もう惜しくは無いですから、弾があれから来ると、岩があったので、そこへ行って、その蔭に坐っていたから、切り抜けて生き残った。弾は上を飛んで行くから、騒いで、あれから来るからといって、あれに行っているのは死んでいますが、向かって来るのは、片がわをさがして陰の方にいれば弾は当らない。最後だから何にも恐くもありませんでした。
子供たちは、戻って行って、田原屋取りというところに置いてありました。田原屋取りは真栄里の東辺でありました。
その田原 屋取りというところが どうして わかったかといいますと、ちょっと知った人でしたが、照屋で、部落の知った人が来たら入れるといって、壕をさらえていました。四、五人入れるくらい、二、三人入れるくらい、昼は岩の陰に隠れていて 壕を 掘っていると、敵は港川方面に来ているという。わたしたちは港川へ下ろうというのに。逆に港川から下って来て、夕方でしたが、入られるところがあるなら、わたしたちも助けてくれといって、北上原の人ですがね、伯楽して歩いたといってわしが島尻なら全部知っているから、あたしたちも命をシノガシテ（切り抜けさせて）くれよという。そこで七十人余り、後になり先きになりして、分れないで、死ぬのもいっしょだといって、照屋から今申し上げた真栄里の東の田原屋取りへ行って、また伊敷へ行って、また糸数へ越えてから、またもといた真栄里の東の田原屋取りにおりました。するとアメリカーがここに捕えに来るといいますから、もうその時は、この七十二人の団体が、一さんに歩いて、喜屋武・福地へ行ったわけです。
喜屋武・福地には一夜いただけで、翌日十二時に立って夜にはギーザにつきました。摩文仁の割り取りを通って、道は伯楽して知っているのがおりますから、横道には入らないで、近道をして、歩きました。途中、二人の子供たちが、甘蔗を折って来て食べるといって、甘蔗畑で破片で二人疵しただけで、捕えられてはいけないといって、一目散に走ったんですよ。
ギーザのあっち方は阿檀山でかためられていたのではありませんかね、そうしてギーザでは兵隊も突撃するとはいっていましたがね、夜中にわたしたちのところへ来まして、分れましたが、夜明けにまた来て、民間の人の着物を着て、いっしょに捕虜になりました。兵隊たちは民間人の着物を着て、子供たちも負んぶして、具志頭から港川にトラックでつれて行かれましたが、いつの世にも頭のいい人はいいことをします。一中の先生だったという人でしたが、わたしたちが捕虜になって具志頭に行きましたら、アメリカ兵といっしょになって、われわれを迎えているんです。「大人はどうなる

かわからないが子供たちの命は助かるから心配するな」といっていました。

登又（中城村）部落の連中も合して七十二名でした。百名（ぐんな）へつれられて行ったので、登又屋取りの連中をさがしたが、どこにも見当らない。そうしたら久手堅（知念村）へ行ったということがわかりました。

この登又屋取りの人たちは、自分の部落に近い方へといって最初久手堅へ行って、それからどこかへ移ったのでしょうが、そのために北部の久志村の大川へ移されたそうであります。

われわれ七十二人戦争では生き残って港川から百名へ来たのに、終戦後、登川の親しくしていた兄さんに、その後のことを訊ねて見ました。そうしたら、七人家族が、戦争では生き残ったのに、大川へ行ってから、父母初め、五人も死んで、生き残ったのは、自分とすぐ下の次男と二人きりだといっていました。大川では、みんな餓死したようであります。マラリヤも流行して、栄養失調で、年寄り幼い子供はほとんど死んだという話でありました。

わたしたち二夫婦と甥姪の十七名は全部無事に百名で捕虜生活をして、自分の部落へ帰って来ました。

註、　山本さんの兄弟は、首里の平ガマーではお母さんが怪我で亡くなったが、首里から島尻へ逃げ出した十七名の全員が、無事に自分等の幸地部落へ帰っている。これは、この沖縄戦では犠牲の少ない一例である。

山本さんが防衛隊に取られなかったのは、当時病身であったからだとのことである。

与那嶺　な　へ（四十歳）　石部隊工兵隊炊事

二月頃でありましたか、本土から工兵隊が幸地の部落に入って来ましたのは。そうして女の人も手伝人として、お茶を出したり、兵隊さんたちが夜勤するというので、豆腐を持って行って慰問をしたり、また、各班ごとに芋を一戸一斤ずつ集めて、兵隊さんに上げて、また、野菜を買いに行ったり、野菜を持って慰問する人もあって、冬瓜など、大きいのを貰って兵隊さんに上げた、また砂糖ですね、一斤で五十銭ずつで売る人もあれば、売らないで慰問をする人もおるし、牛蒡なんかも野菜のあるだけは、幸地の部落はすべて兵隊に上げて、また、山羊など豚なんかも売らないで、それをすべて慰問をやったんです。そうして、野菜も芋もなくなってからは、山にあるフキですね、その茎を取って上げました。それはもうやがて米軍が上陸するという頃でありました。それから味噌もないからというので、大きい組は、各戸茶碗に盛って、中くらいの班は茶碗のいっぱい盛らないで、各戸集めてそんなにしたわけです。

それから空襲が来てからは、あっちこっちの家も焼け出されておりますから、わたしたちもめいめい覚悟した。この部落もみんな焼けてしまった。それから艦砲ですね。そんなのが時どき来た時まではわたしは最後までここにおりましたけれども、それから兵隊は首

里へ引きあげまして民の人はめいめいになったわけです。

その時から、また孫たちと自分は、部落の後に壕があるからそこに避難した。また別の方に避難して十五日くらいそこにいたら、敵は上原の方に来ておるからそこからも出なさいといって立ちのきが来ましたので、それからは一日に一回ずつ御飯も食べた。男もおらないから、自分一人で子供を養っております。それをつれて、一回ごはんを食べさせたら、つぎは無いから言いつけて、またそこからも立ちのかされました。それでお墓に入ってですね、自分は壕を掘ることができませんから、自分の墓を開けて、墓の中にいて、そこに二十日くらいおりましたが、そうしたら太平洋の方から艦砲が来ましてですね、太平洋に浮かんでいる軍艦から。そうして隣りは艦砲に襲われて、隣りの子供が亡くなったから、わたしはそれをおんぶして、余所の墓の前にその子を届けた。そして自分たちはそこにいたら、山部隊が来て、そこを立ち退かされましてね、それで首里へ行くことにしました。

首里へ行く途中に、昼の十時頃であったんです。その時に自分の子供も、兄弟もいっしょに行く途中で、わたしは艦砲に引き倒されてですね、筵も持っておりますから、それに被われたために弾がよけられているから、ちょっとこっち怪我をして、怪我をしておるからわたしの兄さんが、わたしをおんぶして、墓に行って、一週間くらいそこに休んでから首里に行った。

首里へ行く時にまたやっぱし、わたしたちが首里へ避難するのであれば、弁ケ岳が最後であると、話を聞いたので、そのもっとも安全な弁ケ岳へ行こうねといって、歩いている時に、幸地の部落にいた兵隊さんが、人の家を壊しておったんです。首里の人の家を壊してそれで壕をつくるといっていましたが、「ああ、おばさんたちですか」といって、わたしたちを案内して、念仏壕といってありましたがですね、兵隊は、大勢そこにかたまって、入っておりました。とても大きな壕でした。

兵隊たちは、わたしが怪我しているので、大丈夫ですか、といってくれました。わたしの怪我は、はれてですね、それでその弾を幸地にいられた軍医さん、何といいましたかねお名前は、お医者さんがいらっしゃったでしょう。その方が治療して下さって、そこで癒して下さいました。それで、そこで癒りましたから、兵隊の鉄帽の日覆いを縫ったり、壕も掘っているから、ゆっくりそこで土を運んだりして手伝いをしました。兵隊さんは、前田の方へ二十人一組くらいで出て行くんですよ。しかし帰って来るのは、その一つの組では四、五名だけです。みんなやられて、帰っては来ないんですね。

そこに田口軍曹という方がおりました。その方が前田の方へ出て、足を切られて帰って来ましたが、もう駄目になりそうだといって、味噌汁が欲しいといいました。味噌は自分が持っていました。その味噌は艦砲のために、砂がまじっているものでありましたが、お湯でその味噌を溶かして、田口軍曹に上げました。

それで、そこにしばらくいて兵隊さんの看護しておりましたが、そこにもいられなくなって、そこも立ちのきになりました。爆風が来て、白い布で張って防ぐが兵隊さんもそこにおられないから立ちのきました。

そこから出まして、夜の一時頃、道もわからないので、足にまか

して歩いて行くわけです。自分の子供も、孫も、長女の子供もおりました。孫と余所の子供も二人。わたしが、砂糖をそこから貰って出るまでに、わたしは残されてしまって、それでどこへ行ったらいいかわかりませんで、一晩は通信隊のところにいました。そこで、「あなたはスパイであるから撃つ」といって、銃も構えていたけれども、わたしはこんなこんなにして、孫たちに置き残されて、自分一人こんなにして歩いているのですから助けて下さい、と頼みました。

それでも兵隊は、「あなたは殺す」といって、銃を向けたんです。「そこは民の人が入れるところではない」、というもんですから、わたしはどこからどこへ歩いて来て今までは兵隊さんのお手伝いもしたけれど、こんなにしていっときのあやまちで、道もわからないで、捨てられておるのですから、助けて下さい、といったら、それではあなたは兵隊は誰だれを知っておるか、といいます。わたしは、工兵隊の金木少佐もよく知っております。牛島中将もわたしたちの家にお見えになって、正月に別れの会もされて、工兵隊の兵隊さんたちはほとんどみんな知っております、といったら、やっとわかってくれて、そんなら連れていってやるといって、そこからはまた上の壕に行って、そこの壕には、ハルちゃん（長女のこと）たちがおるからといって、その壕に行きました。そうしたらハルちゃんたちはおったんです。そこには、幸地の人も大勢いましたが、兵隊さんたちは、幸地にいた時は、幸地のみなさんにお世話になって、そのお陰さんでいろいろとできたのだから、今度は、米とか、酒とかこっちにあるから上げましょうといったが、それを煮て食べるところがございませんでした。岩の壕の中でありますから、自分が持っている食糧を全部すてて、体だけしか入れない、ずっと下に入って行くのですから、ひとりひとり。そこで少しでも燃やしたなら敵が弾を撃つからといって、もう兵隊さんも絶対煮ては食べられない、水ですね、岩からしたたる水ですよ、口が渇くから口を開けて、そのしずくを飲むんです。

この壕にわたしが来た時ですね、金木少佐が上って来られてですね、今の時だ、艦砲も来ないから早くはいりなさいといって、わたしを入れて下さったんです。それでわたしは、通信隊で、こんなことがありましたよ、と申し上げたら、わたしの名を言ったら誰だってわかるのに、とおっしゃったので、そう言いましたと申しました。

その壕には、兵隊の怪我した方も寝ておられたんですよ。そうすると、その兵隊さんを誰も考えてくれる人もおらないで、気の毒に思いましたが、わたしたちもどうすることもできません。そとにちょっとの間でも出たら艦砲が来ますからね、わたしたちの壕は。そこに一週間もおらないうちに、また島尻の方へ立ちのきということになりました。

一日橋を通って、島尻に下りまして、その途中には、女であるのか、男であるのかわからない、みんな弾に当って死んでですね、それをずっと見て歩いていますから、自分たちもあんなになるのかねと思って、何ともいわれない暗い気持ちがしました。

一日橋を越えて島尻へ下るには、豊見城村の方へ行って、それから糸数へ行きました。そうしたら糸数の壕は、兵隊さんがいっぱい

入っておるから、兵隊さんといっしょになったら殺されるからと思って、岩の片陰に雨も降りますが、そこでわたしたちは二晩は寝たんです。糸数に行く時は、野原に一晩寝ましたが、どこの村、部落の野原であるのかわかりません。

それで、そこでも女であるのか、男であるのか、もう死んでおりますからね、荷物を担いだまま死んでいる人もいました。それを見ると、しぜんと、わたしたちもあんなになるだろうねと思い、そう思いながら歩いていました。そうすると艦砲はあっちがわに落ちる。その時はわたしたちはこっちがわへよけます。艦砲は、かならず同じところに二回落ちますから、落ちる時にはひとところに。それでこっちに行こうといってこっちへ行くとこっちには落ちませんでした。

糸数の壕で三日か休みました。ところがそこもまた、敵がそこまで来ておるから早く早くといって、兵隊さんが、ちっともそこに落ちついて居させませんでした。早く出て行け、早く出て行けといって、最初から、兵隊さんは火を燃やすなら、みんなわたしが殺すぞ、といって脅したり、民が兵隊のところにおったら殺すよ、とそういったから、またこっちからわたしたちは、後にも先きにも死ぬのであるから、どうすればいいかね、といって、足の行くところに歩いて行ったら、今度は酒タリガマ（酒をつくる、自然洞窟）に行ったんです。酒タリガマに行ったら島尻の方がたはみんなそこに避難しておられて、こっちで火を燃やしたら大変ですよ、とおっしゃったんです。

そうしたらそこで兵隊さんが、カンパン菓子ですね、みんなにそれを二つずつ食べさせて貰いました。

またアズキですね、避難用といってアズキと砂糖を交ぜ合せたものを、持っている人がくれました。わたしたちは食糧は少しも持っておりませんから、持っておる人から貰って食べるほかはありません。子供たちはアズキ砂糖を食べたからだったと思いますが、みんな腹を下してですよ、そこでまあ雨には濡れるし、子供たちは腹は腹で下して、その子供たちは大変苦しんでおりました。それだからといって助ける人はおりません。女ばかりでありますから、そこではとても苦しい思いをしてですね、こんな戦争がまたとあったら大変と思って、今でも心配であります。戦争が今にあったらもうテレビみたいに（テレビの戦争もののことだろう）見たくありませんですよ。こんな苦しいことはございませんでした。

そうして一人おる息子も戦争に奪られて、防衛隊に取られて行ったんですけれど、これも四月（米軍上陸は四月一日）に確実に戦死してしまったこともわかりました。誰も助ける人もおらんから、こんなにしておるより、自分も死ぬ方がいいと思っていたけれども、みんなでもう少し、もう少しといって、頑張れ頑張れといわれて、やっておりました。

それから十日くらい経ってから、アメリカの兵隊さんは、自分のところに弾を落して、その弾は人がかたまっておるところで、上原の人がやられてですね、二人やられて、一人は死んで、一人は怪我が癒って元気であります。その人の怪我は頭でありましたので、頭がふらふらになっていたんです。そうして百名の病院に入ってよくなりました。

酒タリガマから追い出されて、十メートルばかり離れた、ガニ小ガマ（小蟹壕）に行った。そこに入って、首里の松島小のお父さんという方が手を上げて、みんな助かったんです。

アメリカに捕えられるとみんな殺されるからといって、みんなあきらめておりましたけれども、首里の松島小のお父さんという方が手をあげてですね、みんな助けて下さった。それたちに捕えられるよりは死んだ方がましだといって死んだ人もおりましたよ、そのガニ小ガマで。

そうして捕えられたのは、一時頃で、それは五月はすぎていたです。二十日（六月）ぐらいでしょうね、おぼえている人もございますけれど、自分はそれは憶えません。

捕えられた時には、一日中雨降りで、雨に濡れて、もうみんな朝から五時まで雨に濡れて、大きい雨です。それで、雨の降る時は、思い出します、わたしたちは。そうしてそれまで、ごはんは、一日中食べないで、百名のそこは本部であったんです。本部へつれて行って、みんなまとめて殺すといってなんだと、陰口はそんなに言っておりました。そうしたら殺さないからといって、ガムですね、ガムを二世が子供たちに食べさせて、自分も食べて子供たちにも食べさせたんです。また薪木ですね、火を燃やしてですね、火の中にぶち込むのかもしれないね、と思っていたが、それはしないで、ベビーさんはこっちにやって火に当らしなさいという、一日雨に濡れていましたから。

そうして六時頃までそこにいて、その時の本部から着物も貰って、食べものも食べさせられた。殺さないから、とそんなにして捕虜されて助かったんです。

わたしの主人は二十四歳で亡くなりました。子供は女一人に男一人で、また長女の子供が男一人で、また自分の夫の兄弟の子が小さい時から育てた子がおります。親たちは大阪におりまして、その子もつれて。

それから長女の夫が支那事変に、兵隊に行って、その子供をわたしが育てて。

百名の本部に捕虜なってからは、わたしたちの沖縄の女が、隊長さんの面倒を見る方がおられましたので、ここにいた人たちは、そのお陰で優遇されました。

捕虜取られるまでが難儀しました。首里から下る時に、そこに置いて、子供や孫の手をひいていますし、腿の方に怪我していますし、二軒分の食糧を持つ力がないんですね。それで、後はどこかで拾って食べると思っておりましたが、糸数へ下るまで、何も食べませんでした。食糧を持たなかったひとつの理由は、怪我したり、弾が激しいので、もう殺されるかもしれないからといった考えもあったんです。

わたしの怪我は、こっちから入って、こっちから破片が出て、今はこんなになっております。百名の浜松さんですね、あっちの方だちにだったですがね、あの方たちにわたしは破片を出して助けて貰いました。百名には病院がありました。

わたしの疵は、一応は兵隊の壕でね、その時に治療したが、まだ残っていたが捕虜に取られて、百名で治療しました。

註、　前に首里の壕で、治療して癒ったといわれたが、破片が残

っていて、おまけに食糧のない体の衰弱などで、悪くなったのだろう、示された疵も相当に大きく貫通みたいに二か所、よく堪えて逃げ廻っていたことも想像される。

前川ガラガラのこと　わたしは疲れていましたから、そしてマラリアにかかって、何にもできない、こっちに来るまでは。ごはんなどは食べたことありませんでした。男がいる人は食糧を持っているけれど自分は何も持っておりません（前川ガラガラにも長らくいたでしょう――他の人の発言、それによって、酒タリガマから移ったガニ小ーガマが前川ガラガラであるように言われた）。前川ガラガラガマといって、大雨が降ってですね、やっぱり生きている人でもそこから渡るといって、大勢流されて死んだ人が、沢山おりますよ。こうしてみんな 死んでしまってですね、自分でも、少し間違えば流されて死んでいたんですよ。その前川ガラガラで人びとが流される中におりましたけれど、ガラガラガマ から人が 流して捨てた釜ですね、記念として今も置いてあります。孫たちに 記念として。

流れる水は初めは少しずつこうして、だんだんそうして屋根のようにあります。天井のようにして、こうして、それがいっぱいなります（瞬間に増水することの形容だが、はっきり形に浮ばない）。そしてここから船を通されるくらいでありますがね、こうして男も女もあっちへ渡って行ったら助かるといって、そこを渡ろうとする時に流されてね、そうして流された人は港川に流されて、与那原の人は沢山でありましたよ。幸地の人ではあの仲門小よ、あっちの嫡子（長男）、あれは手を怪我していたが、他の人と首を抱き合って渡って行くといって、手はこうして持ち上げていたが、流されて、あれは現にわたしたちといっしょでしたが、「おばさん、こっちにおったら危いからわたしはあっちへ越えて行くから」といったんですが、川の中で流されてしまいましたよ。

わたしたちは、だめになってもこっちにおるから、とそこにしがみついていました。うちらでも、少し足をすべらしたら、もう流されて死んでしまいましたよ。

わたしたちのところは段が無かったからです。段がないからちょうどこんなにして立っていますからね、それですから、少しすべったらもう下へ落ちて流れてしもうのです。

あっちが安全といって、渡ろうとする人たちは、急に水が流れて来たもんですから、みんな流されてしまいましたよ。あれよ、あれよといってですね。助けることはできなかったんですよ。そこに避難して、家も造ってあったんです仮小屋を。その家も流されてですね、もうあっちこっち泳ぐ人もおるけれども、水はいちどにどっと流れて行くから、もう動ききれないのです。水が膝くらいの時は歩かれましたが、それが急にどっと流れて来たので、水が高くなっておりましたからね。そこから生きた人はおりません。

そうしてその翌る日に港川に行って見ましたら、死んだ人は水ぶくれしてですね、お母さんも流された、お父さんも流された、子供も流されたといって、みんな自分の身内をさがしておりました。さがされた人たちは、みんな大きく肥っております。顔もまんまるくなって、幸地の人は郵便局長さんの長男ひとりだったんです。手を怪我してですね、わたしはあっちに渡って行くといって、見ていて流

されてもうそれっきりです。わたしたちはそこにひっかかってどこにも行きませんでした。水は川のずっと上に上って来たんです。下にいた人は全部そこまではこないからといって、ボンヤリしておったですけれども、自分は、まっさきに上っておった。

そしてそこにお釜があってですね、小さい鍋とお釜があったのを拾って持っていた。どこででも、芋などを掘って来て煮て食べようといって持ったけれども煮るものがないので、二、三日人から貰ったものをたべて、そこで捕虜取られていますから。酒造り壕から小蟹壕（ガニ小ガマ）は少し離れております。小蟹壕というのが前川ガラガラガマです。ガラガラ（註を参照のこと）がとても恐かったです。あんな水、それはもうありません。

前川ガラガラというところは、すぐゴウゴウと音を立てますよ。水が音を立てると、ガラガラではなくて、ゴウゴウと大きな音がするのです。

前川ガラガラのずっと上の壕に、そこに兵隊さんがおりました。前川ガラガラの近くには、大きな壕はありませんでしたね、前川ガラガラみたいなところは。前川ガラガラには、何千人という人でしたよ。

前川ガラガラの近くに、兵隊が何千人もいたといわれる壕、あれが酒タリガマです。

註、　前川ガラガラは、前川部落の南、前川から具志頭へ通じる道が港川に流れる川にかかる橋の近くに、地表と垂直の穴があるが、石を落すと、底深くガラガラ音を立てながら落ちていくところから、誰いうとなくこの名称ができたのであろう。琉球石灰岩といわれる岩石の中に、垂直の穴が屈折して下っているので、落した石が屈折している岩に当って音を出し反響もいっしょになって、ガラガラと特異な音を出すのであろう。

この前川ガラガラの穴も、多分橋よりずっと下流になってだろうが、その川へ抜けているそうである（文化財保護委事務局、多和田真淳主事による）。

与那嶺さんの言われる前川ガラガラは、その川のことであるが、川が前川ガラガラの近くにあることで、川のことを前川ガラガラと呼んでいたか、ガラガラがその川へ抜けているので、そういうふうに言ったか、いずれにしても、与那嶺さんの言われる前川ガラガラは、港川へ流れている前川の近くの川の中のことである。

この川の、このあたりは、見たことのない特異な状態である。水は全くなかったが、川床が深く、両岸は岩で、天井だけあいた琉球石灰岩をつき貫いている地下の横壕みたいな格好である。両岸には、一階、あるいは二階も突き出て、人間がいることのできるようになったところがあるのであろう。わたくしは橋上から下流、上流を見ただけで、川岸について歩いたのではなかった。

この川に避難していた人たちが、急の出水に逃げることができなくて、多くの人が死んだということは、あちこちで聞いた。何百、何千という声があったが、まだ信憑性のある犠牲者数は、はっきり掴んでない。琉球政府法務局臨時土地調査局発行（昭和四十年一月二十五日発行）五万分一の地図には、この川のことを「ユヒ川」と記している。下流になると、この川は沖縄のどこで

も見られる普通の川で港川橋がかかっている。

前川ガラガラの穴、すぐ近くの橋から、何十メートルくらい離れているか、あるいは百メートル、二百メートルも離れているか気をつけなかったので、正確には言えないが、そう長い距離を歩いた記憶はないが、火山のクリエーターみたいに陥没した場所がある。表面の直径は、百メートルばかりあるかもしれないが、この陥没地帯は、現在では、周囲の崖まで欝蒼たる樹木に被われている。崖の木に支えられて下りて行くと平坦になり、しばらく歩くと、珍らしい自然の創造を見せられる。北の方からつずいている地下壕が、一旦この凹地で現われ、川状をつくっているがそこも水はない。しかし小石の川原が、水が勢いよく流れることのあることを示している。

珍らしい造化というのはこれではない。この水のない川は、大きく口をあけた琉球石灰岩の雄壮な壕である。豪雨時には一時に洪水となって流れる荒あらしい跡がはっきりわかる小石の川原が入口に流れているが、ちょっと入ると壕床も岩と石だけである。この壕の入口からどれくらい歩いたところであろう。これは恐らくわが日本国中でもこのような珍奇な石はないのではないかとわたしは思っている。洞窟の天井から、長さ何メートル、胴廻りどれだけだろう、雄大な男根が斜めに突き出ている。写真に取ると、全く実物である。何千年かかった自然の創造か知らんが、あまりにも見事である。種子神（さねしん）の壕というそうで、女の人たちが拝んでいる話を聞いた。

この種子神の壕は東に傾いて、一度び水が出たら、たちまち人間など吸い込むであろうと思わすごう壮な壕だが、これも前川ガラガラと与那嶺さんの言う前川の川に地下をもぐって一つになるそうである（前同多和田さんより聞く）。前川ガラガラの近くに、もう一つガラビの壕というのがある。この壕は、入口が東で、種子神壕とは反対に西へ抜けている。日本の将兵が四千名くらい入っていたという。種子神壕とはあべこべに、このガラビ壕は陥没地帯から上に上がって横壕になるが、わたくしが再三行った七、八年前までは、多分兵隊の遺骨であっただろう、入口近くに、三つくらいの山があった。兵隊の炊事した大きな竈も五つ六つ並んであった。与那嶺さんの言われるマヤーガマだそうで、与那嶺さんはこの壕にも寄られて、それからガラガラの近くのユヒ川の上流、谷底みたいな前川部落に近い川岸にいられて、大水にあい、助かった。あの川底に避難していたら、両岸が岩の崖だから、這い上ることは困難で、「一人も助からなかった」と与那嶺さんの言われるのがうなずける。

与那嶺　正　一（四十歳）　防衛隊

はじめわたしは真和志小学校へ、防衛召集取られて行きました。召集は、十月であったですかな、真和志小学校に相当長くいました。二、三か月いたように思うんですがね、そこから、あちこちに通って、いろいろやっていたんです。兵隊の指揮で壕掘りもやれば、野菜作りもするし、薪取りなどもしました。

防衛召集されて真和志小学校に集まったのはあちこちの人で、何百人かしりません。大勢で、そこで各中隊、各班に分れて、各班ご

とに仕事はしていましたが、あちこち行くには、すべて歩いていました。

真和志小学校が焼けたので、それから大里村の当間・仲程に移動しました。そこには、球部隊の重砲陣地がありましたので、球部隊の兵隊といっしょに作業するわけです。

そこでも壕掘りですね、掘るのは若い兵隊がいますから、兵隊が掘りますが、われわれはその掘った土運びや、そとの整理でありました。しかし兵隊の言いつけ通り、その時どきによって、何でもさせられました。重砲を引っ張ったり、その時によって何をやるのかきまってはいませんでした。重砲を引っ張るには、最初は牽引車もありましたが、これが爆撃で駄目になったので、人間が引っ張って移動しました。上の言いつけ通り、二、三十人で縄を引っ張って動かすのでした。

それから弾運びですね、兵隊に引率されて行くのです。弾は豊見城村の金良・長堂や、南風原村の津嘉山などから、弁ケ岳へ運ぶんです。兵隊の案内で、防衛隊のわたしたちは、背中に背嚢みたいに負うのですが、それは随分重いものでした。道すじは、南風原の喜屋武・本部から南風原を通って、新川を越え、首里のナゲーラを通って行くのですが、敵弾が落ちるので危いから休むことはできません。しかし夜ですから、大して弾は落ちません。アメリカは夜はずっと後の方へ引きあげるんですね、艦砲は落ちることは落ちますが昼のようにひどくはないんです。弾運びは、夜ですよ。四月いっぱいくらい、当間・仲程では兵隊さんといっしょに何もかもやりました。弾運びは何よりもきつかったです。

食事は、少かったので、それも辛らかったですね。兵隊は飯盒に飯を入れますが、防衛隊は、小さい茶碗の一ぱいくらいずつ貰います。一日三度ありはしましたが、汁はないんです。芋の葉や菜っぱをおかずにしました。

わたくしは、当間・仲程の重砲隊陣地で負傷しました。みんなが昼、外で休んでいる時でした。どこから来たのか、破片が大腿部に当りました。それで右の大腿部ですから、右足がしびれて利かなくなりました。みんないっしょに坐っていても、誰に当るかわかりませんからね。今話しているのに、あッという間に即死する人もあるんです。それで怪我してもお医者さんがいるわけではないし、治療はできません。捕虜になってから治療しました。ずっとウジが出て、人間の運というものは……助かっています（不思議ですよ。円く、目のように二か所たたき掘られて、わたしが塩をつっ込んでやりました。捕虜の時です。と山本亀一さんの発言）。

当間・仲程を、重砲隊は引きあげる時に、わたしは負傷していますので、捨てられてしまいました。負傷して、何もならないものは捨ててしもうのです。

それでわたしは、匐って進んだり、杖にすがって歩いたりしているうちに、自分の幸地の人たちに行きあって、母や妻子が、具志頭の後原にいるということを聞きましたので、後原というところをさがして行きました。もうその時は六月の初め頃になっていましたでしょうね。

後原の方へやっと辿りついて見ましたら、親や妻子はそこにいませんで、新垣に移動したというのでした。

それから妻子をさがして、新垣の方へ行くことにしました。後原から新垣は、怪我しているわたしには、遠い道でありました。島尻は来たことがなかったので道もよくわかりませんでしたが、人びとについて歩いたり、道をたずねたりして、ようやく杖にすがって歩きました。飲まず食わずですから相当の苦労をしました。

どういう道を通ったか、よくわかりませんが、多分、与座岳と八重瀬岳の間を通って行ったんだと思います。

新垣に行って妻子にあうことができました。妻子は、球部隊の炊事をしていたという仮小屋におりました。島尻に行ったら、民間人の入る壕はありません。石垣の根もとか、木の下とか、何かちっとでも隠れることのできるものがあれば、そこに身をよせていたのでしたが、妻や子供たちは、その球部隊の炊事小屋にぎっしり入り込んでいました。横になって眠るということはできません。みんな坐って、壁に背中をもたれているのは、一番いい方でありました。みんな膝を突き合しているのです。昼も食事のしたくや飯を食う時だけが離ればなれになるので、家の中にぎっしり入っているわけです。そとの石垣の根もとや木の下よりは、仮小屋で茅の屋根があるのでみんなが、かなり安心して入っていたんですね。

わたしの母は、後原にいた時に、破片に当って亡くなっていました。六十一歳だったんですが、そう弱ってもいませんし、妻子の手足まといになるようなことがないのでしたが、後原でやられてしまったんです。

新垣では、妻子といっしょになった時は、大変嬉しく思いました。わたしは怪我していますし、食糧あさりもできません。妻も妊娠八か月になっていましたので、畑へ行って芽芋をほじくって来るということができませんでしたので、食べ物には大変苦労しました。井戸があって水はありました。

しかしそこにいる人間は、全く蟻の群みたいに、集まっておりました。歩く時だって蟻の行列のように大勢の人がつづくのです。その時の島尻の人は、まるで蟻のようにすき間がないほど、どこもかも避難民でした。

わたしたちは、家内も食糧さがしはできませんし、わたしも怪我していますので、持って来たものだけで、すっかり困りましたが、同じ幸地の人が、煙草も、お金もくれました。同じ避難民でも苦労は人によってちがいました。

わたしが、新垣に妻子をさがして行って、あうことができて、食糧の苦労はしながらも妻子と共に暮していまして、十日ほどした後でありました。

わたしは同じ新垣に、弟が新垣部落のちょっと真中のところにいましたので、弟の家を訪ねて行っていました。昼の何時頃でしょうか。そうして弟のところにいましたら、妻子のいるところは全滅したという知らせがありました。

わたしの妻子も全滅してしまいました。妻はその時、三十一歳か二歳かです。妊娠八か月の身重でしたから、人一倍避難には辛い思いをしたのですが、即死したようです。子供は二人、一人は尋常科六年で長男でした。つぎが三年で女の子でした。

その時は直撃が、蟻の群れのようなところに落ちたのですから、少くとも六、七十人は死んだんでしょう。吹っ飛ばされて、跡形も

残らない人も沢山あったんですね。幸地の前ノンシノ（屋号）のお父さんなんか、影も形も無くなったんですね、とにかくその時は大勢の人ですよ。蟻の群れみたいにいるのですから、直撃が落ちると、一ぺんに百人くらいはやられましたよ。一つ屋敷にまるで蟻の群のように。

その時わたしの妹もいっしょでありましたが、これは運よく、怪我はしましたが生きてわたしたちのところへ来ました。

それからわたしは一週間くらいして、捕虜になりました。ずっと弟のところにいたんです。怪我しているので、わたしはそとを歩きませんでした。アメリカは憎いことは憎いけれども弟たちといっしょに捕虜になりましたよ。捕虜取られる時は、男は去勢されて、殺される、女はアメリカ兵のオモチャにされるという、友軍の兵がアメリカ兵の悪口言っていたことを信じ込んでいましたので、いよいよ去勢されて殺されるものと思っておりました。

そうして捕虜になったら、女と男は別べつにわけるのです。夫婦でも別べつにするんですね。それで、やっぱり男は殺して、女はアメリカ兵の慰みものにするんだなと思いました。それは友軍の兵隊のいうアメリカの兵隊の悪口を信じて守っていたからでした。

しかし、車に乗せて連れて行く時になってから、何だか様子がちがう、これは殺すのではないのではないかと思いました。

百名へつれて行かれましたが、アメリカーの車に乗せてくれました。

わたしは、弟の家にいて、怪我してどこへも出ませんでしたが、捕虜に弟たちといっしょに取られて、アメリカの兵隊に集合場所へつれられて行く時、妻子の眠っているすぐそばの道を通って、妻子のいるところを見ました。怪我して来ている妹から委しく話もきいていますので、遠見に妻子が眠っているのを見ました。そこでは、幸地の人でも二家族全滅していますが、あまりに新垣部落は弾が激しくて、妻子の全滅の場所を誰も、何んともすることもできずに、直撃を受けまして、人間はいなくなったわけです。

註、　当時の事情が、与那嶺さんも、一週間ばかり弟たちの家にいても、妻子の死体を見届けて埋葬することは不可能であったのでないかと想像する。一週間ばかりの余裕があるのに行って見ていない。しかもこの場所は誰一人さわった人はいないらしい。六十人くらいの人が一弾でやられたらしいが、それは多分爆弾で、五百キロか或は一トン爆弾を喰ったのではないかと思われる。艦砲ではこんなに大量殺戮はできないから、爆弾を飛行機から落して、避難民の群れに投下したことには間違いなかろう。何等戦力と関係のない避難民の群衆を充分に知りながら、この無抵抗な一般市民へ、五百キロ、一トンの爆弾を落し、一瞬にこの大量の無辜の人びとの命を奪うアメリカ軍の行為には、人道の国といわれる米国だけに、不可解の思いをしみじみ感じる。無力無抵抗、しかも生き延びようと必死になっている一般市民である。

百名から知念同宇（ドウムラ）へ移りまして、わたしは怪我していますので、ずっと弟たちの世話になって捕虜生活を送りました。

知念にいた時、最初は、新垣で死んでいる妻子の遺骨がいつも気になりまして、せめて遺骨でも早く拾ってやろうと思いましたが、最初は、アメリカが許しませんでした。あとで知念の区長さんの

肝煎りで、遺骨拾集が許されましたので、妻子の遺骨を拾いました。捕虜になる時に見ていますし、また、妹がいっしょでありましたから、妻子の遺骨はよくわかりました。はっきりしていました。八か月になる胎内にいた子供の骨もよくわかりましたよ。

その時幸地の人で前にもいいましたが一家全滅が二軒ありましたし、一人だけ残っている家族もいまして、そこでは犠牲は大きかったのでした。まるで、蟻の群のように人間はあの屋敷につまっていましたからね。前にも言いましたが、道を歩く時だって、ほんとに蟻の行列みたいで、思い出してもよくあの有様は話すことができません。あの南部で、いつ殺されるか、殺されるなら直撃で、といった気持ちで歩いていた人たちでなければ、あの時のことはわからないでしょうね。

知念で弟に世話なっている時も、怪我して何もできないし、妻子はいないし、言うに言われぬ辛い思いは、振り捨てようと思ってもなかなかそうはできませんでした。

知念では一年余りいましたでしょうね、こっち来てからも、皆がうち造って団体生活でしたが、わたしは家族が全滅ですから弟の家にずっと世話なりました。

幸地は一家全滅は外にも多いんです。幸地は比較的外より多いのではないかと思います。わたしの近い親戚にも、一家全滅が二軒あります。一人か、二人しか残っていない親戚もあります。

幸地来てからはわたしも作業に出ることができました。芋を作ったりしましたが、食糧は、ほとんど「芋ニー」（芋をつきくだいたもの）でした。

そうです、桃原も一家全滅は多い筈です。わたしたちが存じているタケ原先生の御一家なども全滅していられます。

弟の方は、不思議にも、家族が無事でありました。妻子も。

妹は右足も、胸も、頭に怪我していました。あれだけ人間の死んだ爆弾でありましたから、助かったのは運がよかったんですね、現在も元気にしています。遺骨取りには冬になって、捕虜になって半年すぎてから行きました。

註、　与那嶺正一さんは、家族全員をわずか二か月の間に失われた。六十二歳のお母さん、三十一か二かのもっとも女盛りの妊娠八か月の奥さん、尋常六年の長男、三年生の長女、全員を失っていられる。そうして知念村同字で捕虜生活一年余を送って、故里幸地へ帰っていられるが、その時の心境をお訊ねした。しかし今日といえども心の痛さに堪えられないのか、なるべくは考えまいという心で生存を肯定されるお心境かと窺える。多分あの悲しいことはすべて考えまい、忘れようということで今日をきずき、この人生に光を求めていられるのでないかと察し、深くお訊きするのが罪深いことのようで、当時のご心境やご境遇をこれ以上おききしないようにした。

ここで今は、われわれが取り落していけないことは、あの大量虐殺の跡を、多くの避難民がかえり見ることのできなかったことである。与那嶺さんの弟さんなど健在であるが、兄の妻子の死んでいるのを埋葬もしないでそのまま放置している。これは、他の人たちも同じである。

アメリカの殺戮が、いかに激しく、辛じて生きている一般避難

民は、この大量の死骸を顧みる心さえ持てなかった。これは人間の、生命までも押しつめられ、肉親の死も顧みることができなかった、自分自身も死が目前にあった、自分の生命も死の間際にあったからで非人情といったのん気なものではなかったのである。これを見逃しては、当時の実相を、見失うものではないかと思われる。

沢 岻 ツ ル（四十三歳） 主 婦

夫は防衛隊に取られていましたが、帰って来まして、ここは激戦地になるから、早く自分等の墓を開いて、墓に行って入るようにしなさいと言ってから帰って行きましたので、子供たちと共に、それでは墓に行こうね、といって墓に行きました。墓には長らくいましたが、友軍の兵隊が来て、今ここから出ないと撃つぞ、射殺されてもいいなら明日までいろ、今日で撃つぞ、といいましたので、それでは、そうしてはいけないもの、兄弟たちと相談しようなといって、その墓から出まして、墓は閉じました。

わたしたちは、喜屋武・本部（南風原村）まで夜歩いて行きました。昼は一歩も出ませんでした。

喜屋武・本部で、十四歳になる三男と、十六歳になる女の子とが、毎日壕を掘って、大きな壕を掘りました。そうしてそこにはずいぶん長らくおりました。

しかしここにも住むことができなくなりました。小満・芒種の五月の雨の季節になりまして、壕は水が溜りましたから。

この喜屋武・本部では、今二十九歳になる子供はまだ幼い四歳でありましたから、ひもじくもさせられませんでしたので、ちょうど米五合を十円かで買って、他人が持っているのから分けて、それを小さい土瓶に煮て、二日も三日も、ある間は一口ずつ食べさせて、大人は水を飲まして、水も飲まなくても、戦さは来ているもの死ぬんだといって、何も食べませんでした。

そこには長らく入っていましたが、またそこからは、神里（かんざと）・平川（ひらかわ）の向かいの部落に行きました。そこの家はほんの小さいところでしたが、そこのお爺さんは、弾の破片が、バンバン大きな音を立てて来ても、十四になるわたしの三男をつれて、芋を植えるんですよ。植えて置くとお前たちもいっしょに食べるんだぞ。戦さを負かしたらお前たちは親類であるぞ、掘って食べるんだぞといって、いっしょうけんめい近くの畑に、わたしの三男と芋を植えるのです。あれ、弾が来たぞ、来たぞと逃げ込んだりしながら、（また）芋蔓を植えていましたよ。六十余りのお爺さん夫婦、お爺さんの奥さんと二人であります。この人の家で、わたしの三男とお爺さんは、家の近くの畑に行って、芋蔓を植えて、植えながら艦砲が来ると、おいおい弾が来るぞ、来たぞ、と逃げ込んで来まして、こんな毎日でした。しかし三男はこんなに毎日植えていますが、わたしたちは前へ進んで行くのです。敵がこっち来ているぞといったら、前へ前へと越えて行きますから。

それから具志頭村後原（くしばる）に行きました。食べ物はわたしの姉の夫がおりますからね、後原には。そうしてそこはまた門中（ムンチュウ）（一族、縁者のこと）が沢山おりますよ。石川門中が。姉さんの夫がいっしょでした。そこで小さい壕を掘って、やっと入られるくらいの壕でありました。

ありました。

「ねえ、おばさんよ、わたしたち門中からこれだけ生きて来ているから、これだけでも分けて食べておきなさい、命を何とかつなぐために」

姉さんの夫は子（ね＝十二支の子）の人でしたから防衛隊を免がれて、取られませんでした。わたしの夫は丑の人でしたから取られましたが、子（ね）の人からは免がれました。四十四まで最初は取られましたが、最後は年の関係などありませんでしたよ。そこに避難しているのもかたっぱしから、「出ろ」というのでありますもの。義勇隊へ出ろ、出なければ殺すというんですから。子供は自分で歩いて、わたしは四つになる子を負ぶって。お碗を一つと、この子供にくれるものだもの持ちなさいといって、芋クズちょっと持って、行きつくところで湯を入れて飲まして、どこへ行っても、このようにしていました。また、石川のお父さんといって、わたしの姉の夫であります。十円では米が買えるといいますよ、十円分の米買って来ようよ、バーチー（バーチーはおばさんだが、多分自分の子供等が母の妹をそう呼んでいたので、姉の夫も義妹をそう呼んだのだろう）といいますので、それでは兄さん買って来て下さいといって、この戦さがかちいくさするまでは持つようにしましようといって、兄さんに米を頼みました。

ところが、たとえ米があっても、大抵五時から後は、絶対に煙は見せてはいけない、明りは見せてはいけないというので、煮て食べられません。ボロの着物などを張り廻わして周囲を遮切って、このような土瓶に、米三粒ずつ入れて、煮て、その時は小満・芒種の五月の雨期でありましたので、火を燃やすにも困りましたが、食べさせなければいけないからといって、また時どきは、芋クズを水で溶かしてこれを飲まして、芋クズは一升ばかり持っていました。

捕虜は真壁・新垣で取られましたが、知念・玉城に来てからは、おい、あっちにあの子供がひっくり返ってバタバタしているので、あの子供たちにも飲ましてやろうといって、「さあ、お前たちの親は怪我しておるのだから飲みなさい」といって、これにも飲まして、またあっちでも泣く子供に、あれにも飲ましてやれといって飲まして、しかし腹いっぱい飲ましてやるのはありませんでした。

わたしも芋クズは少ししか持っていませんでしたから、ようやく命をつなぐために水にとかして、チョロチョロ飲ますくらいでありました。盛升（もります）の一升くらいしか、最初から持っておりませんでした。

わたしはまた、今二十五歳、満で二十四になる子を、お腹を大きくしていましたのですから、それでわたしはどこにも出ませんでした。いつもうちにこもって。

そうしてわたしには、十六になる娘と、十四になる三男がおりましたから、お母さんはどこにも出るなよ、死ぬ時はいっしょに死ぬので、親がいなくてわたしたちだけ生きていたら、生きている何の甲斐もない。死ぬならいっしょだから、お母さんは絶対にそとには出るなよ、というので、ええ、そうか、とわたしはそとに出ませんでした。子供が生れたのは、十月十四日でした。今元気で満二十四歳になっています。

お父さんが防衛隊に取られて出て行ったのは、三月六日でありま

した。三月六日に村役所に集合して、それからみんな、並んで行進して、浦添村の前田へ。わたしの家は道の上でありますから、「わたしは兵隊に取られたんだぞ、兵隊になったぞ」と喜んで、自慢して行きましたよ。

わたしの長男は幹部候補生でありました。十月十日に入営でした。それでいいますのには、「ねえ、お父さん、わたしなんかが行ったら、アメリカとの戦争は、立派に負かしてやるから、お父さんが来る時は、奇麗さっぱり負ける、負けるのであるから来られないようにしなさい、兵隊へは」

「おい、清吉、女の子まで、虫喰い芋を持って壕掘りをしているあんばいだ、お前たちが兵隊になると立派に負かすというが、その時になるとその結果はわかるよ」と男の親はいいましたよ。

しかし男の親、わたしたちのお父さんも防衛隊に取られておらなくなっています。

長男は幹部候補生で熊本へ行きました。次男は長崎徴用で、それから久留米の連隊に召集されて二人兵隊です。それで長男は、男の親を励まして、「わたしたちが行けば、アメリカは立派に負かすんだ、お父さんたちまでは兵隊は取らない、四十を越す年の者が何ができるか、絶対に負けないよ日本は」。

長男は農林学校を卒業しましたが、青年師範学校を卒業したのであります。養成所といって、一か年ありましたから、合せて四か年学校へ行ったわけです。それで、お前はこんなに長らく、学校ばかりで、小学校の一年からずっと学校だが、といって少しずつは働くこともしないかといったら、もう少ししてから、もう少しやったらうんと働きますよといって、青年師範学校に入って、そこを卒業した。今度は、「お母さん、わたしは幹部候補生に合格しておるぞ、みんな受けたが、合格したのはたった四名だけですよ、さあ、勝ち戦さをして来ましようね」と巧いことを言って、親たちを巧くおちつけて、出て行きました。十月十日に入営、金十円送れと電報が来ましたので、無事についたね、と安心しました。

それで十月十日の長男の入隊の日は、わたしはそれを祝うために豆腐もつくりました（豆腐は当時の沖縄では御馳走であった）。また赤飯も炊くために小豆も煮ました。そうしたら、あの大空襲で、那覇は全部焼き払われ、こっちも大騒ぎで、小豆も引っくり返して、入営のお祝もだめになりました。

それから、後原にもいられなくなって、真壁・新垣へ行きました。夜に歩くのですから、どこをどう歩いたかわかりませんが、新垣部落へ行きました。

新垣部落の壕では与那嶺さんといっしょのところでした。わたしたちは、自分の家族は皆元気であります。ちっとずつ疵を負っていましたが。

新垣の部落ですが、あまり遠くは離れていません、互に見えるところ。ごはん食べるときにも親と子も互に見合って（親と子というのは沢岻ツルさん自分のお母さんと自分のこと）見えるところだが、弾は誰に当るかわからない、間の悪い者はやられる。壕といってはないですよ。石垣の下とか、木の下に住んでいました。あっちいってからは、壕といっては何もない。兵隊だけが壕には入ることができるので、わたしたちは、地面に穴を掘りました。上は木を持って来て置いて、ちよっと壕を掘って、後から来るのは、わたしたちも生きのびさせてくれとくりかえしていって、お尻をちよっと置くくらい。

註、　同席の与那嶺正一さん発言。　西内原（屋号）の家族は全員、石垣の下にいて、直撃を受けて、石垣もいっしょにバンバンという音と共に吹っ飛んでしまって、形も何もなくなった。

これは親と子と命はみんな別べつ、わたしは女の親から兄からちやんと向かい合っていましたよ。わたしたちは小さい壕を掘って、ニクブクを被せて入っていましたが、女親や兄さんに、「兄さん、あなたたちは煮てあるか」と手で持って見せるくらいでしたよ。

「うん、あるよ」と上げて見せるくらいでした。

そうしたら十メートルも離れているかね、いや、そんなに離れていない、木の下に片端から並べて葬って来ましたよ、わたしたちは。わたしの母親や兄さんや姉さんたちがやられたんです、みんな。それから三日目に捕虜取られました。

註、　与那嶺正一さん発言。あっちのことは当った人でなければわかりませんといい、そうして誰か男の人が吹飛ばされるのを見たことも話された。他の人も発言して激しかったことをいった。そうして沢岻ツルさんの実家、お母さん兄さん初め一家六名全員が全滅しているが、それは、与那嶺正一さんの家族が全滅するより前のことらしい。

今は台湾帰りがおりますよ。これが来たから家はありますので、それまでは家はありませんでしたよ（実家が空屋敷であったこと）。

親の家がやられていますから、兄弟の子みんな見なければなりません。それで親たちがやられていますからここにいたくもないが、いる間は、茶トウもシーワドナイル（お茶も上げましようと思って）といって、葬ってあるところはすぐそこですから、そこに行って上げて、「受け取って下さいよ、わたしたちもいつ亡くなるかわからない、あなたがたもこのようであるから、あなたがただけ念じることはできない、わたしたちが亡くなれば誰も念じる人はいません」といって手を合しました。

註、　沢岻ツルさんの話は、前後入り交じっていて、これで終っている。そうして実家が全滅したとのことだが、その情景は全然話されていない。それで、七十年九月十二日、名嘉所長と同道、沢岻さん宅を訪ねて、追加録音して貰った。

新垣の壕に住んでいた通りのことをお話しいたしましよう。その当時のことは、広っぱにこうして壕を掘りまして、他人の家から丸太を盗んで来て、これを掘った穴の上に置いて、またこれが上にニクブクを被せて、それに土を置いて、これが中に入っては出て、親や兄弟もこっちだし、あの与那嶺さんたちもこっちだし、また全部シマ（自分の部落のこと）の人も近所におりますよね。わたしの妹の夫の兄弟たちもみんないっしょでありましたよ。あっちでもこっちでも、そうして暮していました。

この二人の子供たちは、先きになって行きます。先になって取って来るものが食べるものはありますので、後になって、恐がって行くと、なくなって何もないのでありました。食糧の入っていた軍の壕が敵の弾でたたきこわされていますので、小石とまじっている米

を、この十四なる三男が、少しずつ、沢山担ぐと危いから袋に入れて、着物を持って着物に包んで、肩に担いで持って来て、家（壕）の中で、米と石とえり分けて、そうして新垣では暮していましたが、あのような田芋（里芋と似た里芋より小さいが水田につくる）の葉も取って来て、それをどろどろ炊いて、もう明日の朝までね、といって煮ましても激しいのでありますよね、こんな小さい壕で炊きます。着物を被ぶせて、そうでないと灯りが上から見えると大変だぞと、そういったあんばいでした。

そうして自分の兄さんたちが新垣でみんなやられてからは、物も欲しくありません。すぐそこに葬ってあるのでありますから。弟の妻はお尻から下腹部にかけて腫れましてね、新垣の壕でもうおしまいになる頃、水もざくざくしているのですから、壕まけしまして、この弟の子供等二人が育ったのは、うちの十六歳と十四歳の姉弟二人のおかげであります。今では長男は三十四歳なります。弟は三十歳なりますから元気で家庭もおのおの持っておりますが、その当時の苦しさは、またとは話したくありません。元気のある大きな方はみんなおらないのでありますから（ここで泣き声になって話しがつまって止まる）。

註、　同席の長女発言。子供二人というのは次男叔父の子供なんです。おばさんは元気でありましたが腫れていました、壕負けして。

食い物も無いのでありますし、この二人が取って来るので、分け合って食べて、まあ、これだけ炊いてあるんだから、明日朝まで少しずつ分けて食べさせようとしていますと、他のおばさんが、おい、お碗の一ぱいは食べさせてくれといえば、またあっちからも食べさせてくれというと、おい、上げなさい、といって、自分たちは水飲んでも暮せるからといって、わたしたちはこんなにして暮しました。もう、石川の家族（姉の家族）みんなおらなくなってですよ。あっちもこっちもみんなおらなくなってしまっているのですよ、自分の方は。サネ松本グワーの連中といっしょに。

わたしたちの子供たち、これらみんな爆風で疵がありました。あの四つなる子もこっちに破片がたたき込まれていました。そうですが小さい子ですから疵は無くなっています。飛んで来る力でかすった疵でした。うちの子供たちは、この兄が教えてあったんです（かもい上に掲げた日本刀を左に立て直立した戦前の陸軍少尉の盛装姿の写真に顔を振り仰いで示す）。弾がバンと音を立てる時には、それと同時に匐いなさいよ、と教えてありましたので、「はい」といってどこでも爆弾がバンとやって来た時には、すぐに匐って、土でたたき込まれて、上から被われますよ。「あれ、今度はやられた、もう見えなくなってしまったよ」と言っておると、少し間を置いて、這い出ましたよ。そんなにして生きました。あれが（三男のこと）ほんとに苦労しています。これは（同席の長女、当時十六歳）女でありますから、飛び出して行って、アガチ（働いて）来ては、煮て食べさせてくれましたが、あの子も大変しっかりしております。今では戦さの後の疵もありません。飛び出して行っては取って来ておりました。どんなものでも、唐豆でも、ちょっとしたものでも、壕からも掃き集めて来て、うち（壕）に帰ってはまた石やゴミと選りわけて、大豆も、紙片れや何にでも包んで来て、食べさせて

おりました。捕虜取られてからも、これが作業に出て、稼いで来ていたから、今まで兄弟たち五名達者だと思っています。

註、　同席の長女に、祖母や伯父一家全滅の情景を訊く。「わたしは見ていませんでした。今母が言ったように広っぱに穴を掘って、それにまた何か垂木みたいなのを持って来て、ニクブクを被せて、それに土を乗せて、それに入るわけです。そのような防空壕をつくる時にやられたんですよ。滅茶めちゃになりました。自分の壕の前ですからね、母たちが入っている前で」。

わたしは見ていました。艦砲でしょう。次男の嫁は、子供といっしょに寝ていました。兄さんの嫁姉さんは、夕飯をつくるといって、人参を手に持って、それを煮るしたくをしていました。お父さん（沢岻さんの長男兄さん）は前に出て、円匙で防空壕をつくろうとして、掘っていたのですが、その時にバンといって落ちたから、もう、アイエーヤー、アヒーヤ、ウランヒャー（ああ、お兄さんは、おらんぞ、亡くなってしまったぞ）と叫んで飛び出して行ったら、兄さんの体は飛んでしまって何もない、もうその時には、おばあさんも、姉さん（嫂）も子供たちも、寝ていたのだけは目を醒ましたら何でもないが。

バンミカサレテ、アイエーナー、おばあン、ヌン、ウラン、アヒーンウラン、ネーサヌンウラン　デイチ、ナー　ウリカラヤ　ドマングタットクルガ、ムルナー　シグ　バンミカスルチカラサアーイ、チッソクシ、ムル、トーリテ　ネービラン、トー　アヒーターヤ　クヌ穴ンカイ　イイブシャヌド、ウレ　壕ンデイチ　掘タシガ、ナマノトコロヤ　壕掘イドクルヤアラン、ナー二、三日セーナー　ウマチョーンデルモン戦サヤ、ワッターヤ　捕虜トラッテ、手切リ　ヒサチリシナー、イナグワラビヤ　イッペー　ガンマリシー　ワチャク　サーニナー、ケーラシ　クルバシ　スンディルモン、ナー　サッタンテーン　ウレー　生リルヤル、ナー　ウマ　チドウルモン戦争ヤ、ウリガン　マーンカイ　ヒニギラレーガ、ウマ　チョーンドー　チョーンドーシ、ナーウマチョーンドー　バーチーヨー　テ手アギテ、マルハダカナテ　ンヂランネー　デージショーンドーシ、メーニチン　モーイドシャビールモン、メーニチ　チチルスルモン、ナー　ンジーショカホカネーラン。

「バンとやられて、ああ、おばあさんも亡くなった、兄さんも亡くなった、姉さんも亡くなったといって、もうそれからは、動転、あわてふためいたところで、みんなもう、バンとやった力で、窒息して、みんな倒れて、亡くなっておらなくなりました。兄さんたちは、この穴に入りたかったがために、これを壕といって、掘ったが、今の場合は壕掘るどころではない、もう二、三日するとも、こっちまで来ているというんだもの戦さは。わたしたちは捕虜取られて、手を切られ足を切られて、女の子は大変いたずらされて、いじめられて、思うままにもてあそぶというが、もうそうされても、その運命である。もう戦争はここまで来ているんだもの、これがどこへ逃げられるものか、こっちに来ているぞ、来ているぞ、といって、おばさんよう、手を上げて、丸裸になって、出なければ、大変になっているよといって、毎日、おいでなるのでありますもの。毎日聞くのでありますもの。もう出るよりほかはない」（モーイは、来るという昔の平民の敬語）。

そうしておばあさんたち、そこに葬っておかねばと思って、この十四歳になる子供と、松本小のおじさんとで。一人は大きくて一人は小さいから、引きずり引きずりして、おばあさん（お母さん、沢岻さんの）から兄さん、姉さん、かまど小、また次男の子、こんなに並べて葬って、どうなろうとわたしたちが生きてここにいる間はこうして上げますからね、お母さん、兄弟たちよ、わたしたちもいつ亡くなるかわからん、あなたたちさえこんなに先になられたんだもの。

捕虜になると手を切り、足を切り、女の子はひどい目にあわされるというので、捕虜になることは大変だとわたしがいったら、わたしの姉の夫が、「そうではないよおばさん、あっちあたりは、手を上げてみんな出ているというんだもの、もうのがれられないよおばさん、さあ、これ上っておられなさい」、といいましたので、それではいっしょにつれて行って下さいよ、とこんなふうでありました。ところがこのわたしの姉の夫も、大きな破片を肩に打ち込まれて負傷しました。

この義兄（にいさん）は、捕虜になっていっしょに知念へ行きました。班長も四、五日やりましたが、暑いので、わたしに、おばさん、海へ行って浴びて来ます、といって海で浴びて来ましたが、それで破傷風になったのか、亡くなりました。姉は子供一人といっしょに、新垣で亡くなりました。弾に当って。夫婦と子供一人と三人亡くなりましたが、子供三人は助かって残っております。

わたしの母は食べるたびに、わたしが妊娠していることはわかっていたんですね、五月からは。それで、お前はあるかと、碗とお箸を持って、訊きました。はい、わたしたちはありますよ、とこんなでありました。

あっちも（実家）人数が多くてね、わたしたちはこっちがわでありました。わたしたちのところへ近ずいて来るといって、そんなことになっておるんです。あっちがわは木が沢山あって、木のそばでですが、こっちがわの木のそばに来るといってこうなってしまったんです。

それで、次男の嫁、残った二人の子供はわたしたちのところへつれて来ました。

註、　西内原の家族が、石垣もろ共に吹っ飛んでしまったという与那嶺正一さんのお話しを、沢岻さん母娘がたも見られたのでないかと訊ねたが、それは二人共見なかったそうである。そうして当時十六歳だった長女は、あの時の新垣の死人（しにひと）は、足が踏まれないくらい死んでいましたよ、踏んで歩くくらい死んだ人がずらっと並んでいましたよ、といった。

新垣の話は、並んで死んでいるんですもの。ちょっと何かあると思ってあけたら死んだ人が並んでいるんですもの。わたしたちは親も兄弟もその壕に葬ったんですから、他の人に較べたら大変幸福の方であります。それで今わたしたちの家は、物知り（易や拝み屋のこと）のところへ行っても、死んだ人たちへの不足は出て来ません。他の家は、何もある、かにもあるといって、物知り（三世相、易者など）を頼むと出ますが、わたしたちの家は何も出ません、立派に葬りましたから。

死んだ人は大変ですよ、大きく腫れて。死んだ人はみんなそのまです。放ったらかして、大きくはれて。

与那嶺正一さんの家族が全滅したのは見ません。昼でも自分の子供たちのことしか見ることはできません。出て行けば、どこかでやられはしなかったかと、自分の家族の心配しかできません。

註、　長女発言―昼であったら、昼は壕から出ませんからね、夕方弾が止んでから、壕から匐い出て、食物をさがしに行く、昼は一歩でも出ると危いですよ。与那嶺さんのいられたところはすぐ隣りですが、出入口が反対で自分たちのことしかわかりませんよ。一つの屋敷に何十家族いるかわかりません。木の下なんかにいっぱいですね、どこ行っても擬装なんかやってですね、ススキや木の枝なんかで。昼はほとんど出て歩けませんからね、そのまま入っていたり、壕のない人は、ちょっとだけ壕穴を掘って、それの上にあの何か板きれか何か被うて、その下にもうこれくらいはいれたら満足ですよ、あの時であったら。坐るだけで、立つことはできませんでした向こうでの壕は。ただ庭先の木の下にですからね、屋敷の中に。石垣は、前の方にはあったです。だけどうちなんかは前にはいなくて、ちようど庭ですね、木のある庭に、そこにちよっと穴を掘って入っていたんです。屋敷の周りはなんかの木がありました。

家にいる時は、石粉（いしこう）の中から持って来た米をえり分けて置いて、晩になると、着物や何やらで光を遮えぎって煮て、これは明日までのものだよ、あさってまでもある間のものだよといっているんだが、あっちからもこっちからも寄って来る時には、一碗、はい、はいといって、上げるといったぐあいでしたよ、それが、二十五年後の今は、御馳走も沢山あってね。

イナグヌウヤ、ワッターアヒー、アノトチヌクトヤ、ナーハナシブシクヤネービランシガ、アヒーヤ、ハッタラーギーヌイッペータカーエービータシガ、ウリンカイド、ムル、チヌンウットバチ　ンゾービーテールムン、アイエーナーヒャー　ワッター　アヒーヤウランサ、アネヒャーンチンデー　キーカイ、チヌン　ズボヌン　ムル　バラバラエービーテールモン、シグ　ミチャ　サーニ　ウチクマッテ。マーン　クイン　トデネーラン、チブルトカ　ヒサブネトカ、アラサルブンヤヌクヤーニ、フテールママ　ウマンカイ　ウチクマッテド　ウイビークトヨー、ダーナー　チントカ、ムル　ウヌ木ノカーマ　マッチジンデド　カカトービークト、アヒーヤ　モーランサー、アネ　ウヌ　チンヤ、ワッター　アヒー洋服ヤサ、チンヤサ、ンデール　アタイエービータン。

「女の親、わたしたちの兄さん、あの時のことは、もう話したくはありませんが、兄さんは、ハッタラー木の大変高い木でありましたが、この木に、着物も吹っ飛んでいましたもの。ああ　どうしようか、わたしたちの兄さんはいないんだ、おい、見て見よ、木に、着物もズボンも、すべてバラバラでありましたもの。すぐ土で打ち込まれて、どこもかも（体）飛んでない、頭とか、足の骨とか、大きなところは残っていて（穴）掘ってあるままそこに、打ち込まれておるのでありますからね、着物とか、ずっと木の　てっぺんにかかっていますから、兄さんや　居らなくなった、この着物は　わたしたちの兄さんのものなんだ、わたしたちの兄さんの洋服なのだ、といったあんばいでありました」。

弟の嫁は子供が小さいので寝ていたので子供二人と三人は助かりました。坐っていたのは爆風でみんなやられてしまいました。

新垣の部落は、あちこちの人が、いっぱいしていたんでしょう。兄さんたちもこっちだ、兄弟たちもあっちにいるぞ、こっちにもいるよ、といったあんばいで、夜になって壕から出て、親戚があちこちにいるのがわかって、最初のうちは心強く思いましたが、弾が激しくて目の前で親や兄弟がやられるのですから、弾は誰に当るかわかりません。お母さんや兄さんたちを葬ってくれた松本小のおじさんというのは、わたしの妹の夫です。あれたちは、離れたところにおりましたが、行ってつれて来たのでした。

新垣の部落は、どこの屋敷でも押し合い、へし合いで、石垣の根もとにも、部落の廻りの畑や道ばたにもいっぱい避難民がいたのに避難民へ弾は、ひどく打ち込まれました。あっちでは、どれだけ人が死んだかわかりませんよ。

与那嶺さんの家族が全滅したのは、うちの壕とくっついているのですから、うちのお母さんがやられたところとは十メートルも離れていませんし、うちのお母さんたちが先にやられたんでしょう。それで新垣の部落は、すき間がないくらいに、弾が落ちたので、どれだけ人が死んだですか、そこにいた人は、半分以上はやられたと思います。姉さんたちも、わたしたちと離れていましたが、姉さんと子供は、お母さんとどっちが早くやられましたか。

お母さんや兄さんたちといっしょにいた弟の妻子は、運よく寝ていたために助かりましたが、起きていた子供は一人、亡くなりました。そのわたしの弟、この生き残った義妹の夫は、防衛隊に取られて、やはり帰って来ません。どこでどうして戦死したか、これもわかりません。

わたしの夫は、ちょっと帰って来て、墓に入っているように言ってから隊へ引き返して行きましたが、これがお別れで、それからあうことはありませんでした。真壁で見たという人はいますが、たしかのことはわかりません、どこで亡くなったか。それで遺骨もさがすことはできませんでした。

わたしの実家は、全滅しましたので、ずっと空き屋敷でありましたが、台湾に行っていた兄さんの息子が帰りましたので、今は家を起すことができました。

姉さんのところは、夫婦と子供がなくなりましたが、子供三人は残りました。

わたしたちの家は、お父さん（夫）と長男が帰らなかったのですが、戦争中、あんなに激しい中で、いつも土を被って、爆風で疵もしましたが、みんな、小さい疵も癒って今は、五人の子供が、めいめい家も持って、みんな孝行ものであります。わたしの実家の兄弟や姉妹がみんないなくなって、今も悲しさは消えません。

註、当時十六歳だった長女は立派な主婦で上座で勉強していた青年（大学生か高校上級生か）に沢岻さんがお母さん呼んで来い、といって呼び出した。話しが終るといかにもお父さんが懐かしく思われるらしく、家族の安否を思って帰って来て、避難の注意を与えたお父さんの面影を語り、そうして別れてからは遂に見る機会がなかったことを愛惜の情を心に湛えているらしく語った。

六十七歳の沢岻ツルさんは、腰痛で医者へ行き注射して貰ったと、区長さんに案内されているわたくしたちは、その途中であった。

お話は、前後入り乱れ、また繰り返されるところもあるが、わたしは、省略をしなかった。新垣部落も南部における沖縄県民の悲劇の土地であるので、何とか、その当時の状況を伝えたいためである。舌足らず、あるいは話が飛んだりするが、よく読めば、当時の状況が却ってよくわかる、推察もできる。それで、お話を修飾したりすることをさけて、忠実に録音を写し取ることにした。

沢岻よし（四十歳）家事

うちは戦争前からずっとうちにいましたが、戦争になってから、兵隊さんがこっちに来られて、自分の家の前に兵隊が壕を掘りましたのでそれを手伝いしながらいました。

長男は学生募集で、兵庫の川西の方に飛行機つくりに徴用されましたので、それで娘も兄弟があっちにいるもんですから、あっちに行きました。

それで末の男の子がおりますが、年は若いのに召集令状が来ました。前もっては屋良（中飛行場か）などに徴用へ行っていました。十七歳でありましたが召集令状が来たもんですから、わたしは、こんなに若いのに召集令状が来るのかと思って、ききただして見ましたら村に二名しか来てないということでありました。そうして令状は周りに赤い線が二つ通っていました。真赤ではなくて、赤い線が二つでした。

そうして集合は仲西どことかいっていましたが、一旦あの子は行って来てから、またあっちにすぐ集まることになっているといいましたから、もうわたしは、行かさなかったんです。お前が行ったらわたしは大変になるといってやりませんで、いっしょに歩くことにしました。そうして、行かなくても兵隊が前で壕を掘っていますので、その手伝いをしました。

また空襲が来て家からおい出された時は、上の丘の方へ行ってわたしの親たち兄弟たちといっしょになって住んでおりましたが、こっちはもう戦車が通って危いからといってそこから出て、首里の方に行ったもんですから、首里城の付近、あのお父さん（山本亀一さんのこと）のおられた下の方におりました。二十日くらいそこにおりましたがね、二十日内外いたでしょう。それでわたしの次男は、こっちから引き上げて行った工兵隊の石部隊の兵器部にいました。それで、わたしの子供は、この兵器部の兵隊といっしょにいて、水を汲んだりしておりました。わたしの子供は、十七歳になる子です。それで兵器部の兵隊といっしょに働いて、荷物を担いだりしていますから、危いからもう止めなさいといったんですよ、「何でもないよお母さん、平気だよ」といって、そこで兵隊といっしょに、兵器部の兵隊も真裸になってやっていましたが、炊事をしたり、水汲んだり、その子も兵隊の真似をして、真裸になって、手伝っていたんですね。

それでわたしは、危いからもう止めてよ、といったんですが、わ

たしのいうことをきかないで、やっていました。そこであの、ちょうど、あれ何といいますかね、内から破裂して、弾薬が破裂して、兵隊といっしょに、死んだの。その兵隊たちと死んだんです。

そうして兵隊がわたしに告げに来てね、わたしはそこの近くにおりましたから。兵隊が入っている壕が爆発したというので、駈けつけて行ったら、そこに怪我して、うつ伏せになっていますので、わたしはまた、防衛隊も全部出てその壕の入口を掘り取るために掘っていましたので、わたしは助けて下さい、この子も助けて下さいと頼んだが、きかないで、わたしたちはこっちを掘らなければいけないからといって、兵隊が入っておる壕の入口を掘っておりました。そのためにわたしの子供はそこで死んでしまったのです。大きな石で、怪我してうつ伏せになっておりました。わたしは兵隊が知らせに来た時、うちの子は弾に当ったのかと思って駈けつけて行ったのでしたが、もうその子は駄目になっておりました。

また防衛隊の方は入口のすぐ前ですから、埋められている入口を掘っていました。沖縄出身の防衛隊でした。

兵隊がわたしに告げに来ました時は怒鳴るようにあわてていましたが、わたしもそれを追っ駈けて自分も走れるだけ走って行ったのですが、とうとうだめになっていました。わたしは、「あんたはもう自分でそんなことをやっているのだから諦めなさいよ、お前はわたしがいうのを きかないから」とわたしは怒鳴って やりましたがね、一言、「お母さん」といって、もうそれだけですよ。目はわたしをギョロギョロ見ていましたがね、石で胸から下は全部埋められておりました。ただ首から上だけが出ておりました。

註、　この工兵隊壕の爆発は、山本亀一さんの記録に出ていた。三百人くらいの兵隊が弾薬の自然爆発によって死んだだろうということだった。

与那嶺よしさんの次男は、少年の純真さで、軍へひたすら尽していたが、この不慮の爆発事故で、十七歳の短い一生を閉じてしまった。その状況をまざまざと見せられる思いがする。壕内に貯蔵してあった弾薬がどういう訳で発火し爆発したかは、真相を知る由はないだろう。多分少年は水でも汲みに入口近くに来ていたのでお母さんの与那嶺よしさんは、自分の子が頭だけ出しているのを、来るなりわかったようである。沖縄出身防衛隊が、まだ呼吸をしているらしい少年を助け出さないのも、戦争という呪いの悪魔によるのであろうか。

そこからわたくしは 姪の 子供も二人 連れていましたから、自分の父母と壕を別にしていましたが、母もそっちに来ていましたし、また妹も一人、姪の子供も二人、それだけいっしょにいましたが、そこから兵器部の兵隊が島尻へ引きあげるというもんですから、その兵隊といっしょに行ったら、命が助かると思って、兵器部隊といっしょに島尻の方へ行ったんですよ。夜通しに歩きましてね、そうしたら弾は兵隊の行く方にどんどん行きます。妹と姪の子二人は、足が早いからいっしょに歩いているのですが、もう前へ行って、わたしと母は、荷物も沢山持っているから、二人手を取って歩きながら、母は道で弾に当って死んでしまったんです。それで母を畑に置いて、荷物を廻りに置いて、また迎えに来るからねといって立ち去りました。

また父のところは、荷物が多いからその荷物を持って行って、それから父を迎えに行こうねといっていたんです。父は足を怪我していました。足裏を怪我していて歩けなかったもんですから、島尻に行って壕をさがして迎えに行こうね、ということであったので、それで迎えに行きました。そこは首里城の裏に当りますところで、ナゲーラー（原名）の手前で、ハナンダーというところです。そこに父や、わたしがつれている子供の母から子供たち三名自分の 姉から、五名そこにいましたから、戻って父を迎えに行きましたら、わたしたちが父と別れたその夜にアメリカの兵隊に弾を投げられて、焼け死んでいました。首里城の裏がわになっていましてヒジ川に行くところでハナンダーというところでした。

註、　母が亡くなったので、亡くなった母と荷を置いて、父たちのいる首里の壕へ行ったら父が亡くなっていたので、再び死んだ母のところに戻って来たというわけらしい。

母が亡くなったのは、当間下を歩きながらだったのです。まだ一度も歩いたことのないところで、ことに夜でありますから、周りの様子はよくわかりませんが、そこは東風平の手前です、その東風平の手前で母は亡くなっています。そこは十字路になっています。与那原にも行けば那覇にも行く、十字路の手前でありました。

わたしは左手で母の手を持って右がわ、母は 左がわだったんです。そうしてパンと来たもんですから、母はすぐ倒れてダーヒャーサッタセーワンネーといってね、こう倒れたから、わたしは荷物（ダーヒャーは適当な共通語訳が考えつかないが、悪いことに当った時の目下に呼びかける 接頭語と 言ってよくなかろうか、サッタセーワンネーは、やられてしまったよわたしは、でいいだろう）を下して、畑は下っていたんです。道は上って。そうしてそこに毛布を敷いて、母を抱いて、どこですか、どこが痛いか、と訊いても、もう動きもしない、抱いていても気がつかない、どこが痛いかね、といっても頭をこんなにこんなにして「ねえ、動かさないで」と方言で一こと言って、しばらくしたら、母は全部入歯でありましたが、歯が脱けて、パチパチ、パチパチしおったんです。それでわたしは、駄目だねと思って、荷物を二人のものを周りに置いて、毛布は二、三枚持っておりましたから、一枚は下に敷いて、また上から一枚は蔽うて、頭も顔も手拭で被うて、毛布でこんなに頭も被うて、「また迎えに来るからねお母さん」といって、自分は一人でしたが、周り見たら大きな馬も倒れていますしね、もう恐くておられなかったんですよ。わたしもここにいっしょにおるからとはじめはいうておったんですが、もう恐くておられないから、また迎えに来るからねというて自分一人であったが行ったんですよ。行ったらそこはあんまり人は通っていませんでした。

そこからちょっと行ったら東風平に行く道と与那原と那覇に行く十字路になっていましたが、その十字路なんか、爆弾が落ちて、大きな池のようになっていましたが、夜ですからキラキラして真白な道のようになって見えていましたからね、そこでちょうど、わたしの子供と同級生の子供（少年）が通りかかって、セイリはどうしましたかと訊きましたので、セイリは首里で兵隊といっしょに死んでしまったよ、といったら、「はあ」と驚いたらしく、溜息のように言って、「わたしたちも今から弾薬を運びに行くからね、そこから

注意して行きなさいよお母さん、早く通って行きなさい」といいました。わたしの子供と同級生でありましたが、首里の方へ行くといって行きました。

それから自分ひとりで歩いて行ったんですよ。前の方に行ったら、あっちにもこっちにも人が通っていましたから、大勢人がいるところに行ったら、子供負ぶっている人も荷物を担いだ人も、道にも倒れていまして、踏むところ、すべて人間ばかり倒れておりました。東風平に行くところに。もう非常に恐くて。照明弾はポンポン上るので、道に死んでいる人もよく見えました。そうして屋取りに行った時には、もう朝何時頃になっていましたかね、五時頃になっていたかね、それまでぶっ通しに歩いておりました。そしてそこの屋取りに行ったら首里の人が沢山おりましたから、そこで首里の昔の安里、本屋があったところの女の子（娘）夫婦ともおりましたから、「わたしは西原幸地のものですが、わたしひとりですから、知った人もいませんのでいっしょにつれて行って下さい」といったら、その人たちは夫婦でありましたから、はい、いっしょに歩きなさい、いっしょに行ったら助かりますよ、といって、その人たちが連れて行って、大きな家の馬小屋のうしろに隠れていました。

そうしたら、その家の並びの二階の家が、米も沢山買って置いて二階に住んでいましたが、自分が食べるために買って置いた筈だが、食べないで弾に当って二階で死んだといって、その人の子供が、自分の親を埋めるからといって人を頼みに来ていたんですよ。その人が来たから、幸地の人、知った人いませんか、と訊いたら、「ああ来ているよ、わたしの友達の前区長さんもあっちにいるよ」といって、その人が連れて行ってくれた。その連れに行ったところは畑の中の丘ですね、丘の中に壕を掘ってあるところでした。あのう、こんな坂道を登って行って、丘の中に壕を二つ掘ってあって、一方は前区長さんが入っているところ、一方は上って行ってね、五男クシ仲門の今のおばあさんたちがおられたから、その人たちのところにわたしをつれて行って貰ったので「母も死んで自分ひとりになっているから」といったら「はい、いっしょに歩きなさいよ、同じ字の人だし、なぜそんなに遠慮するか、いっしょに歩きなさい」といわれたのでその方たちといっしょになって、その時から、親たちから子供たち、十九人の人がいっしょに歩きましたよ。その丘の後の方にまた、仲門のおじいさんと、今の兄さんは兵隊に行っていたはずだから、あっち行って死んだ沢岻の兄さんだったはず、二人で、立派に壕を掘って、段もつくって、そこに入る積りであったそうですが、兵隊が来て、望遠鏡で、友寄（トモシ）の方を見たら、アメリカの兵隊が作業して道を作っていたそうです。

それでアメリカの兵隊は沖縄人を捕虜にして作業しておるから早く、島尻の方へ行け、と追いやられてね、そこにおられなかったんです。それで、その壕に入らない中に、鍋なども何もかも担いで、また島尻の方に、ちようど与座の方から上って、何というかなあっちは、富盛といってね、富盛の前から通って、八重瀬岳へ上って、また新垣の方へ出て行って、新垣に住んでいたんです。そして新垣に住んでいて、そこは艦砲でやられて、また黄燐弾で家もすべて焼けてしまったんです。新垣には何日くらいいましたかね、十日くらいいたと思いますが、新垣にいた幸地の人は、全部あっちで全滅しています。もうほとんどというほど全滅しているんです。門の石垣のそばにも、また家に住んでいても家も黄燐弾ですぐバット火事を出して焼き殺すしですね、また、あの小屋に入っている人も、またあの壕といっても、木を立てて上から被うていますから、それで弾で死ぬ人もおるし、もうほとんどというほど、家の中に入っていて、火事ではなかったはずですが、家の中に住んでいて、家に蔽われて死んだとかいうことを聞きました。

わたしたちは、家も何も焼けてないから、ちよっとした壕があったので、その壕に入っている時に、兵隊が来て、戦車が二、三台来て、火を吐いて真赤にしてそこへ向かって来たから、焼き殺されて今日はもう駄目だといって、ちようどこっちに入っていたら、その砲はあっちの方へ向かって、わたしたちのいるすぐ前に停ったんですよ。わたしたちは、まだアメリカの兵隊は見たことがないが、若いが背丈が高い兵隊さんたちですから、あらあんなに大きな兵隊さんたちはまだ若いが大きいね、といって、見て見ぬ振りしてもう動きもしませんよ、わたしたちは。動いたら大変だ、見つかったらやられるよといって、みんな話し合っていますから。しかしアメリカの兵隊も見て見ん振りしています。兵隊をさがしていたんですよ。そうして、前から廻っていますが、見て見ぬ振りして、人民には何もしなかったんですよ。

そしてそのまま引き返して行ったから、その晩、九時か十時頃、もうこっちにおったら、あしたは来て殺されるから、中頭の方へ突破しようといって、みんな荷物を担いだ。その時、幸地の人は十九人だが、あの内間の人といっしょに、おじいさんもおばあさんもまた姉さんたちも二十五名いっしょだったんです。二十五名こうして、中頭の方にといって、そこを出て行ったら、あっちにもこっちにも兵隊が焚火してね、夜ですから。焚火してわいわいさわいでいます。道を通ったら、道は酷いが、何の線といったですかね、大きい線も通っていれば、こんな小さい線も通っているでしょう。それを踏んだら大変よ、と言いながら、見えないけれど真暗ですから夜は、道の真中から通って行った。そうして少し行ったらあちらに畑があったから、畑の中から通って田圃の中を通ってね、そこから通りながら、ちようど港川の向かい合い辺であったかね、そこまでいくまでには、内間の人のおじいさんとおばあさんも、おばあさんは二人であったかね、いっしょですが、若いもののように歩けません。その甘蔗畑行くまでにはもうどこへ行ったかわからない。そのまま行方不明になっています。だから娘はうちのおじいさんとおばあさんはどこへ行ったかねと、いっていましたが、どこへ行ったかわからない。夜だから、そのまま死んでしまったのか、どうしたのか。

そうしてその夜は、前へ通ろうとしたら、向こうからすぐ機関銃がパラパラ、パラパラしたもんですからね、それで前へ通れないから、こっちで、明日の晩行こうね、ということで甘蔗畑の中に入っていたら、また朝、薄暗いうちにわたしたちが入っている甘蔗畑の周りをかこんでいました。それでわたしは、わたしが飯を炊いて味噌といっしょにやった池田の兵隊だったんですよ。あの兵隊がくれた繃帯で、こっちも、こっちも、こっちも巻いていますからね、この膝の疵は、長い間痛くて歩けなかったんですよ。右肘のところ

と、右膝、それに左の足の内がわ、それだけ怪我して、真白い繃帯で巻いていたんです。兵隊はわたしを見つめて、わたしは左がわにいて残りの人たちは、内がわに入っていますから、わたしを見つめて、手を抱いて、おいでおいでして、こんなにこんなに（手真似き）していますから、残りの人に、「あんなにしておるよ、わたしは恐いから出て行くよ」といったら、「お前が出て行くとわたしたちまで殺されるから出て行ってはいけないよ」といいましたがね。「わたしを見つめているのに、あなたたちはそこにおりなさい、わたしは出て行きます、わたしに銃を向けているよ」といって出て行ったんですよ。そうしたら、残りの人たちは、大変だよ、大変だよ、といって叱りましたが、「いいえ、わたしを見つけているから、わたしは殺されてもいいから出て行くよ」といって出て行ったら、もう、兵隊たちが、いかにも「痛かったかね」といったようなやり方で、繃帯を巻いているところをさわっていたわって、繃帯を解いて薬を塗ってやってから、また奇麗に巻いてくれました。

それで甘蔗（さとうきび）の中にいる人たちに、疵している人には薬を塗って繃帯をしてくれて、何もしないよ、みんな出て来なさい、といってわたしが誘い出したんですよ。そうして皆が出て来ました。

またわたしはいろいろの細かいものを持っていましたから、残りの人は恐がってこんなものを持っていたら大変だ。道中から来る時に豆の罐詰を持っていたんですよ。これ持っていたら大変だからといって、みんな捨てたわけですよ、甘蔗畑に。道には、山積にして、あっちこっちに罐詰はあったんですよ。だからそんなに沢山あるから、持って行って食べようといって、夜道を通りながら懐に入れて持っていたんですよ。それを兵隊に見られると大変だといって投げ捨てたんですよ。わたしはもう捨てませんでした。それで兵隊に、これはどうするかといいましたら持ちなさいといいました。それで、みんなに、持ちなさいというから、持ちなさい、といったんですが、ほかの人たちはやはり恐がって、持ちませんでした。しかしわたしは懐に入れて持てるだけ持ちました。

捕虜なってみんなが集まっているところに行ったらね、大きなコップにいっぱい入れたコーヒーをわたしに飲ませようとしたんですよ。みんなに飲ませようとしたんですが、わたしからはじめ、口のところ持って来て飲ませようとしたので、わたしは、「いいえ、わたしは飲まない、あなた飲みなさい」といって、この兵隊の口のところへやったんですよ。そうしたら飲んでから、またわたしにくれましたから、わたしは飲んだんですよ。そうしてほかの人たちにも飲ましましたが、子供たちもいまして、みんな疑っていましたが、わたしは飲んだよ、何も入ってないから飲ましなさい、といったら、また取って子供たちにも飲ましました。

いっしょの連れの中に三つになる男の子がおりましたよ。お乳もないし栄養不良になって非常に泣いて痩せていたんですよ。その子供がわいわい泣いているんです。飯を炊いてやりたいんですが、親は恐がって兵隊に言わなかったんですよ。それでわたしが、言葉は通じないから、鍋にお米を入れて、子供がひもじいから、やるかねえといったら、「持って来い、持って来い」と手でいったので、兵隊が飯を炊かすから、お釜に米を磨いで来て持って来たんですが、蠟燭みたいな、終戦直後の 大きな石臼みたようなものに 火をつけて、燃料であったか、何であったかわかりませんが、早速、石を持って来て竈を作って、一時（いっとき）に炊いてあったんですよ。大きな釜に炊いてあったから、そこに集まっている人たちみんなに、またそれが炊けたら兵隊が、罐詰の空罐ですね、それを沢山持って来て、これに入れて食べなさい、といったので、それにお粥を入れてやったんです。またわたしが持っていた罐詰もおかずにして食べなさいと、みんな少しずつお腹は空いていますからといってやったんですよ。

それでその時からまた車に乗って、道なかあっちこっち、わたしは治療をやったんです。それからあちこっち分れて、怪我しないものはどこに、怪我したものはどこにといって分れて、怪我しない人たちは、あのあっちに送られたんですよ、金武の方に。国頭の方に送られて。

わたしは百名に止められて、治療やって、そこで癒ったんです。わたしは息子は兵隊に行っているし、自分ひとりならどこにいても同じだと思っていました。それから妹は、二高女を卒業していましたが、国頭の方に連れられて行って、配給係をしたり教員したりしていたようです。車もないし、交通は不便な時でありましたが、この子が百名にわたしを面会に来たもんですから、今度はわたくしがいっしょに行って見て来ました。この子は具志川で教員していました。作業に出る人は、配給もよくて贅沢しておりましたが、教員は配給もほんの少しずつしかありませんからね。あの黒人が使っているお碗に、水のようにしてご飯炊いて食べておりましたよ。だから姪の子供は二人、あれについていました。わたしは百名で芋をつくっていましたから、姪の子供の下の方と、叔母さんの子と二人はわたしが連れて来て芋で養っておりました。

そうして姪の子は、今は商業高校卒業して銀行へ行っています。

息子は、学生徴用で川西飛行場へ行っていましたが、海軍志願しているから、すぐ海軍に行くという 手紙があって驚いていましたが、工場の係の方が、海軍にやらないように止めたそうでありまして、そうしたら間もなく終戦になりました。

終戦後は一人でありましたが、子供が帰って来て、今は孫も沢山できて、みんな高校へも上っています。

姪の子供等も父母も戦争で亡くしまして、誰もいませんで二人だけの孤児で、叔母たちも夫婦亡くなって子供等ばかり残りました。

与那嶺　カ　マ（四十三歳）　主婦、軍炊事手伝

兵隊に炊事の手伝いに出るようにいわれたので、首里の久場川では、十二、三日兵隊の炊事をしましたが、そこが移動することになって、古波蔵へ行きました。わたしは戦争で、耳がよく聞こえません。

その時は、兵隊さんが炊事をしていましたが、出て行くことになって、炊事の女たちがかわって、飯を炊きに行きました。そこは小さい亜鉛葺の小屋でありましたが、そこへ艦砲が落ちました。炊事に行ったのは十二人でしたが、それから生きたのは二人でありました。一人は意識不明で、兵隊が治療して生きることができたか、多分だめではなかったかと思うんです。その時は、炊事小屋の中

は、肉も骨も飛び散って、誰れのものかわからない。わたしたちも子供たち、その時二人やられました。十六と十七になる二人とも女の子でありました。しかしその時までは、そんなに激しくありませんでしたので、人の家から簞笥の引き出しを取って来て、それに入れて、葬ってやりました。それで遺骨は、戦争が終ってから取って来ることができました。葬ったところは、畑ではありませんで、野原にちゃんとやってありました。

耳も十二名から二人だけ、生き残った時にそうなりましたが、体は全部、こんなになっているんですよ。足もこんなにして、あっちこっち全部こんなにして。

註、　与那嶺さんは両足を腿までまくってわれわれに見せた。われわれはその疵跡のすごさに驚かされた。

足のここから破片は出ております。ここは全部です。このへんも（足の付け根は服の上から示す）着物は、こっちに少し残っていましたが、ここらは全部なくなっていました。

頭は、小さい疵が沢山ありました。頭の毛は、こんなになっていました。四、五日櫛でけずって、何とか髪を直そうとしました。

そうしてわたしが眠ろうとしますと、そのまま眠って、起きなくなるというので、ぜんぜん眠らしません、そばにいるものたちが起してくれまして。十二名のうちで、わたし一人が元気でありました。他の一人は、あれは生きることができましたかな。古波蔵の人でしたが、兵隊が治療しに来ても、何も分りませんでしたよ。十二名から二人は生きたのですが、バラバラになって、肉や骨がくっついて、誰のものやら、わかりませんでした。

十二日間は兵隊といっしょでありましたから、その間は兵隊が治療してくれましたが、兵隊がまた、ここから出て行けといわれましたので、その後からは、もうさまようことになりました。十二日間は兵隊が治療してくれましたよ。

もう自分勝手に、行き当りぱったり歩きまして、それから津嘉山に行っておりますが、津嘉山の入口の壕に五日おりまして、また照屋の壕でもいましたが、向かい合に兵隊がいまして、そこからも出るように言われたので、そこから出てから、前は何というところであったか、その前の部落でも小さい家があってそこには誰もいませんでしたから、そこに入っておりましたが、またそこにもおられません、高嶺へ行こうとしました。しかし高嶺もみんながおることができないといいますので、与座岳のあたりをさまよって歩きまして、真栄平へ行っております。

真栄平の部落へ行きましたら、あんまり人が多くて、歩いているところは何処も全部人を埋めてあるのだから、もうそこにもおられないよといって新垣へ行きました。

新垣に行きましたところ、あなたがた（与那嶺さん方）は今去られたといった。この方たちが新垣から行ってしまわれた時に、わたしたちはその部落へ行っているわけです。そうして一晩は部落の山羊小屋に入っていましたが、あんまり激しくなりましたから後の木の下に行って、あっちでも四、五日はいたでしょう。四、五日はいましたが、あまりはげしくなって、またこっちからも出て、またも新垣の部落（真栄平の言い間違いではないかと思う）に行きましたら、あっちはもう家は一軒も残っていませんでしたよ。

それで、その前の方、畑の溝に、芋蔓の枯れたのを集めて、それで蔽うて入っていました。兵隊が退（しりぞ）いて来ていますので、またそこからも出て、また前に行った。前は何という部落だったか、そこから出て、その後は、喜屋武の下あたりを歩いた。そこもいることができないといったので、東の方へ行って、東の海の崖下に下りた。そこは潮がクワッタイ、クワッタイするところに、三日はおりました。ご飯は、煮て持っているのです。それで子供等にやろうと置いてあったら、お釜ごと全部兵隊が持って行って無い。

また海から、避難民は出ろといって呼んだ。マイクから。もう今は戦さは止んでいるよ、と上に登って行って、野原を歩こうとしたところ、向こうから友軍が銃を構えて歩かしません。今度は東がわから歩いて行って、阿檀林の中に休んでいましたが、あっちで、三男比嘉のお父さんたちといっしょになりました。三男比嘉のお父さんは、「お前たちの子供をアビラシルンサー（声を出さしめると）殺すぞ」といわれた。三男比嘉のお父さんは、阿檀の実（球形、表面凹凸がある。直径二十糎内外）これを持って来て、アガリカマ（屋号）のお母さんの子にですよ、「お前たちの子供を叫ばすと殺すぞ」といって、わたしたちの子も同じ年だったが、泣かしたら殺すぞ、といっていられた。

そこでは、土の中に水の出るところをさがして、湯呑み茶碗の底くらいたまると、それを四つになる子に飲まして、また溜る時にお前は飲ますといって、湯呑みの底を充たすくらいたまったら飲ましてやって。それから、夜になったので水汲みに行ったところ、溝から泥土で濁った水を汲んで来て、年上のものたちに飲ますつもりであったが、これをみんなが飲んだ。

こっちにいると、戦車か何か知らなかったが、ゴロゴロ音を立てて走っていたので、こっちにもいられないといって、また元のところへ行ったところが、あっちは全部焼けてありません。東の海端の阿檀林の中は、わたしたちが帰って来た時に、そこから出る人たちもいましたが、「もう終戦なっているから、出る方がいいよ」といっていました。つぎつぎに出て来る人もあったが、自分たちのいたところへ行くには、この道だろうな、と通って来てあっちがわに行こうとしたら、アメリカーが、「こっちだ」といって、名城へつれて来られて、そこへ車を持って来て、座安・伊良波に泊らないで、その日に野嵩へ行きました。また野嵩では、そう長らくは食糧は困りませんでした。行って直きは、切り升（盛らないで縁と同じに切る）一人一合ずつでありましたから汁も作って飲ますし、飯も炊いてやりました。

あの阿檀の中にいた時が、食べ物はないし、水もない。喜屋武の阿檀の中で、そこに長くいましたから、浜には三日くらい、阿檀の中には長くいました。米と味噌と脂（あぶら）を持っていましたが、米は無くなって、味噌と脂とをまぜて、それを少しずつなめさせておりました。後の阿檀の中には五日くらいおりました。出ろといわれたので出たが、あっちから友軍が銃を構えたから東がわの阿檀の中に行きました。そこでは水もなく、四つになる一番下の子に少し水を飲ましまして、またもう一度雨が降ったらといって、水をためて飲まそうとしました。

子供は四つと、七つと、九つと、十二歳の四名。この四名をつ

れて。

体が痛いということは わかりませんでした。 麻痺して感じません。そばにいる人が、こんなになれば眠ったらそのまま眠ってしまうよといって、いつもそんなにして。

指も、寒くなると痛むが、この右の手は、肉がはぎ取られて引っくり返っていましたよ。友軍が骨にはさわってないからこの通りにくっつけておけといって、最初は、引っくり返っているので切った方がいいのでないかといったが、骨は大丈夫だから、そのままして置いた方がいいといって、こんなになっています。

破片はこっちから二つ 出ました。 破片は、無くなって、 また出て、またも無くなって、自然に真赤になって、一ぺんにはでなくて根太のようになって 後には口が開いて、 破片が出て 来ました。 二か所から。 一か所は避難地区で四か月くらいで、一か所は、一か年二か月くらいして出ました。無くなるんですが、また出て来ます。

耳もよく聞こえません。どうにかできないかなと思っています。体全体でありますよ、足から、 手から、これから 全体でありますよ。わたしは、ほんとは、国のためにやったのでありますから。わたしは、こっちにいた時から兵隊のことを やったのでありますから。体も全体で、頭もですから、時どき頭がトロ（物ごとが考えられない状態をいっているらしい）なる時もあって、大変異風（変）な具合になるんだがね。今のくらいの話しは、わたしは聞こえません。冬は悪くなりますよ。

註、 与那嶺カマさんは、ほとんど全身に大小の破片を受けて、身体障害者である。「どうにか 出来ないかなと思っています。国のためにやったのでありますから」といっているが、それは、軍の炊事のためにこんなに身障者になったのだから、国から年金みたようなものが得られないものかという意味であることを感じ取った。当時の沖縄県民は全部戦争協力者といってもいいのであるが、この与那嶺さんの場合は、直接軍の炊事にたずさわっていたのだから、当然国から年金が支給されていると思ったが、最後になっての 話から、 それが なされていないようである。 同じ西原村上原部落にも、与那嶺さんのように全身に破片を受けている方がいて、人間はこれでも生きる力があるのだな、 と驚かされた。この方は軍と直接関係がなかったので、 年金のような補償は難しいかもしれないが、何はとも、当時の沖縄全県民が、 戦争協力者であったし、そうでなくてもこのような酷い戦禍を受けた身体障害者が、そのまま放ったらかされているのは、国の手落ちといってもいい、南部の防衛隊出征者で、身障者になっているが何等の国から顧り見られていないことに対する不満の声を聞いたこともある。

座談会終了後の与那嶺カマさんの話。―あなた方でも考えて下さい。背骨もわたしはこんなにつぎ合されていますれば、今はわたしは真和志小学校向かいの神谷病院へ通っていますが、那覇病院の前の山田病院でも、主席公舎入口の大浜病院でもレントゲンを撮りました。具志川市の政府立中央病院でも、三か所でレントゲンを撮っておりますが、お前の病気はそのようになっているのだ、癒らないよといわれていますので、それではお金は全部病院へ持って行って自分で使うのはちっとも無いんだなと話しています。それでも痛くて仕様がありませんから、今は神谷病院へ通っています。いくら金が無くても痛いのであるから病院へ行かねばなりません。大野病院へも行きました。また耳は渡嘉敷病院へ行って診て貰っています。国からの調べもありましたが、ダーナー（否定の場合の接頭語）返って来たのでありました（調査書だけが返って来た意味らしい）。

その時男の方が、「あなたのは傷痍軍人として取り扱うはずだが」という発言があった。また女の方が、この国の補償を証明するのは、大野病院でなければいけない、との発言があった。軍の炊事をしていた十二人の女たちの上に爆弾の直撃を受けたが、十一人は即死したが奇跡的にひとりだけ生き残った与那嶺さんである。